

1-483

82-487

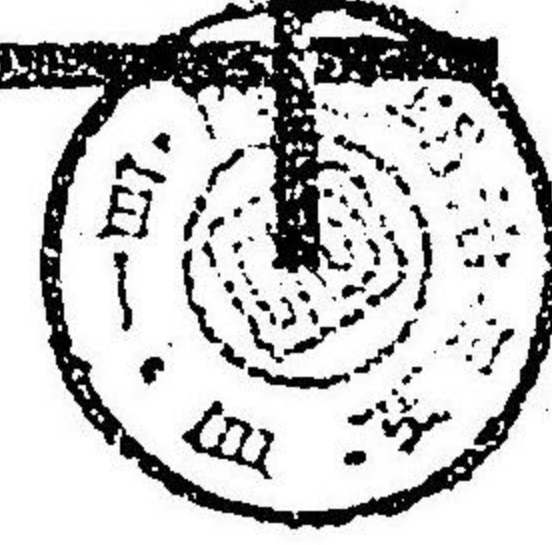


拜啓

公明に於ては徳の法に慣れざる慈泉より、廣く文壇の諸君に呈せんとする札
 簡を呈するも、御座候、書中の語、ま、敬を失し禮を欠き候し、可存之候
 へ非ず、御座候の罪に非ずして、寧ろ慈泉をして深く文字を學ばしめさりし社會の
 罪を、御座候、申せば慈泉の境遇の罪に御座候、偏へに諸君の御寛假を仰
 ぎ候、幸に讀み、斯くの如く、深く文字を學ばざる慈泉より、文壇の諸君に
 對して、禮を呈するの止むを得ざるに至りし事情を御察被
 下度候、小生は學問、識低く候へ共、社會文壇に對する一片の赤心に常に六尺の
 軀を累はし居り申、
 書中諸君の内、
 候は、
 御座候、
 於東京神田客棧
 慈泉漁郎

壬寅二月

於東京神田客棧 慈泉漁郎



公開状目次

坪内逍遙に與ふ……………一

大町桂月に與ふ……………七

久保天隨に與ふ……………一三

大學出身の諸家に與ふ……………一八

 (橋牛、桂月、竹風、蝶二、羽衣等)

正岡子規に與ふ……………二六

廣津柳浪に與ふ……………三〇

小栗風葉に與ふ……………三三

小杉天外に與ふ……………三八

中村春雨に與ふ……………四三

田村松魚に與ふ……………四六

尾崎紅葉に與ふ……………五〇

紅葉門下の諸子に與ふ……………五三

 (風葉、鏡花、春葉、秋聲、荷葉)

幸田露伴に與ふ……………六〇

露伴門下の諸子に與ふ……………六三

 (松魚、夕鷗、新泉、鶴伴等)

山田美妙に與ふ……………六八

江見水蔭に與ふ……………七三

上田敏に與ふ……………七六

後藤宙外に與ふ……………八〇

徳富芦花に與ふ……………八五

内田魯庵に與ふ……………八九

菊池幽芳に與ふ……………九二

與謝野鐵幹に與ふ……………九七

與謝野鐵幹に與ふ(再び)……………一〇二

與謝野晶子に與ふ……………一〇六

三宅花圃に與ふ……………一一二

薄田泣菫に與ふ……………一二五

平尾不孤に與ふ……………一二〇

三宅青軒に與ふ……………一二四

堺枯川に與ふ……………一二六

正岡蕨陽に與ふ……………一三一

千葉江東に與ふ……………一三六

「ほとゝぎす」派の俳人及び萩の家門下の歌人に與ふ一三八
(躬治、鐵幹、薰園等)

「公開状」著者 鷺泉漁郎に與ふ……………一四四

公開状

坪内逍遙に與ふ

鷺 泉 漁 郎 著

坪内逍遙君足下、これを足下が既往の事蹟に就いて鑑みるに、足下がわが文壇に貢献したる功勞や實に大也。當世書生氣質を著して、大に讀者の眼を新たにすると有りしは足下也。「早稲田文學」を發刊して、苦忠十年、常に文運の進歩を促して止まざりしものは又足下也。深く心を英國の文學に潜めて、着實に眞摯に是れが紹介を怠らざりしものは又實に足下也。而して其餘更に秀才の薰陶に力を致して、其の門より宙外抱月、天遊等共に大に騷壇に翔翔す可きの人を出したるもの、又實に足下なる也。これを要するに、足下は正に以て日本文壇今日の隆盛を致す

に與つて方ありたる也。
更に是れを足下が現在の文壇に對する態度に就いて察するに、この前日の熱誠に比してむしろ甚だ冷澹なるもの有るを覺ゆる也。疑きにわが思想界の指針たり燈臺たりし「早稻田文學」が現實の世に容れられずとなして自から黒幕の中に身を隠してより以來、足下もまた其の身を教育界に隠して讀書界又足下が飄逸の神品を見る能はず、思想界また足下が穩健の議論を耳にすること能はず、是れを翹望して止まざること實に幾年而して我が思想界讀書界は未だ一の重味ある足下の創作、評論を見ること能はざる也。思ふに足下は敢へて自から進んで、この輕躁なる今日の文壇に交はらんことを欲するにあらざらんも、而もこの前日の功勞彼れの如きに比して、今日の足下の態度斯くの如きを見ては、僕實に足下を責むるに不忠實を以てせざる可からざる也。

逍遙君足下、今日の文壇の何ぞ輕躁にして無定見なるの甚しきや、かの赤門新出の徒、常にみだりに生嚼ぢりの文學を弄びて、たゞ是新しき一方に人目を引かんことを勉め、時に或は泰西の假面を假り來り、時に或は何等見解無き自己一流の放言を捏造して、往々わが思想界を攪亂して快となせり、是れ夙に識者の指彈して、共に渠れら詭辯の徒と文を語るを耻づ可しとなすところ也。雖も、而も今の世は自くら千人目おき千人の世、偶々渠等の爲にたぶらかされて、妄りに是れ等の詭辯に釣り込まるゝもの、是れ無きを保す可けんや、かの昨年、の文壇に於て最も器々の論議ありし、本能満足主義や、美的生活論や、共に何れも渠れらが詭辯を弄するの料たるに過ぎずと雖も、而も是れら危險なる思想が、わが文壇と社會との到るところに歡迎せられたるもの、足下抑も如何になすぞ、僕等文壇の將來を憂ひて止まざる者にありては、まことに寒心の

この間に現はれたる足下の「馬骨人言」は渠れら詭辯の徒を罵り得ては、
 盡せるに似たり然りと雖も是れた罵りたるのみ未だ深く足下が
 これに對する意見は聞き得ざりし也未だ以て惑亂せる今日の思想界
 を鎮む可き意味あるものにあらざりし也然り足下が「馬骨人言」に於て
 大に憂ふるどころありたり而も足下は更に一步を進めて大に勉むる
 どころ有らんとは欲せざる乎。
 聞くならく足下早稻田の二校に教鞭を執りて傍ら教科書の編纂に心
 を致し爲に業務繁多にしてまた靜かに筆を執るの暇を得ずと是れ或
 は眞ならん乎然りと雖も教育の事や他も各々其の人ありまた敢へて
 足下の如きをして而く執筆の餘暇なきまで繁劇の業務に携はらしむ
 るを要とざる也若し夫れ思想界の教師に至つては其の今日是れが任

に當る可きの士極めて鮮なし足下を推して是れに當らしめんとする
 實に止むを得ざるものあるなり足下や學識博達人格高明而して其の
 穩健の筆致熱烈の氣を含みて巧みに人を教ふるところ眞に今日文壇
 の珍として耻ぢず斯くの如きの足下にして再び起つどころ無くむば
 我が思想界はまさに惑亂より惑亂に陥り輕躁より輕躁に走り行きて
 遂にその底止するどころを知る可からざるに至らむ足下まさに辭す
 るなく袂を投して起つ可ならんか其の固く執つて動かざる如きは斷
 じてわが文壇に忠實なる逍遙君足下の忍ぶべき事にあらざる也。
 逍遙君足下思想惑亂の時代は何れの社會にも文壇にもまた是れ有る
 を免れざるの時代なるが如しと雖も而も是れ有るを以て必ずしも誇
 る可きの事となす可からず人心惑亂して人ますます輕佻に走り人格
 を損し生産を傷け遂に亡國の歎を見る亦必ずしも是れ無きを保せし

斯くの如くんは思想惑亂の時代は決して誇る可きの時代にあらずし
て、寧ろ大に耻づ可きの時代なる也。否むしる大に患ふ可く恐る可きの
時代なる也。斯くの如きの時代に國民の翹望して止まざるところの者
は、斯界一代の巨人忽然として表はれて、着實に忠直に、文壇の爲めに國
家の爲めに、身を犠えとして奮闘し、遂に惑亂の人心を撫して、是れを安
きに導かしむること、是れ也。然り、今日の國民の望んで止まざるところ
のものは、思想界の巨人の出現た、是れのみ。足下たるもの奮つて起た
ざる可からず、夫れ明治の思想界をして今日の隆盛あるを致さしめし
もの、實に足下の功最も多きに居る、其の一朝病に犯さるゝに際しては、
自ら斯界の國子となつて、刀を磨し、匕を振ひ、以て其の治療に力むべき
は、是れ足下が當然の責任にあらずや、敢へて一書を寄せて、以て質す、足
下之を裁せよ。

大町桂月に與ふ

大町桂月君足下、近來の文章性行、何ぞ夫れ寂びれたるの甚しきや、
曾つては明快の頭腦、大に國史を按じ、椽大の筆、大に時の文壇を罵り、優
麗の想巧に美文の粹をもつし、奇矯の行、世の青年をして眼を聳てしめ
ざるなかりし足下、今や一博文館の編輯局に隠れて、また昔日の明快な
る觀察なく、椽大の筆を揮はず、優麗の想を失ひて、奇矯の行ひはた是れ
を見るに由なし、而して足下自身は、たゞ博文館の意に逆らはざらんこ
とを勉め、只管其の地位を守るに汲々たるもの、如し、足下何ぞしかく
速かに若年寄となりしや、嗚呼、當年の奇矯兒、大町桂月の何ぞ夫れしか
く速かにお父さを然たるに至れるや。

(七)

桂月君足下、僕思ふに、今日の文人なるものは、所謂言行一致せざるも

のは有らざる可し。朝たに一某書肆に囑せられて、他の某書肆を罵るの人も、夕に他の某書肆に囑せられては、節を賣つて是れが爲に口を喋む。或はまた昨大に豪放の氣を吐いて、時の騷壇を罵しりし人も、時に感じては立ろに筆を變へて、其身の安きに着かんことを冀うて止まず、滔々たる詩客文人の定見なく、節操なき、恰も小格子の娼婦に似たる者比々としてみな然らざるはなし。嗚呼足下、足下の同學たる赤門の諸文士を初めとして、何々社、何々會、ねはよろ職に操觚の業に従ふもの、誰れかまた小格子の娼婦たらざるものぞ、而して口には侃々として節義を説いて止まず、是れかの娼婦のどもがらが、讀めもせず、分りもせぬくせに、新刊の雜誌や、舶載の英書などを床の間に飾り置くが如きに似たる也。僕らのむしろ滑稽に類せざるやを疑ふ。

斯くの如きの操觚社會に於て、足下の如き士を有せしは、僕ひろかに以

て快となせりし也。是れを足下の全學、赤門の諸文士に比するに、足下理論の筆に於ては、高山樗牛、登張竹風に及ばず、美文韻文の筆に於ては、土井晩翠、戸澤姑射に及ばず、更に是れを赤門以外の諸文士に比するに、評論の方面に於ける早稻田一派の才筆は、到底足下の企て及ぶところにわらず、創作の方面に於ける紅露二家の如きは言はずもかな、其の門下より出でたる風葉、鏡花等の諸士、或は又韻文作家としての薄田泣菫、與謝野鐵幹等、是れはた足下がわづかにその後塵を拜するに過ぎざる可し。然り、足下諸種の伎倆に於て、實に斯くの如く平凡無能なりし也。たゞ夫れ、足下が斯くの如きを以て、直ちに是を棄つべしとなす能はざる所以のもの、は實に其の筆、一種の霸氣を帯びて、かの樗牛、竹風等諸士が列ぬる冷やかなる文字以外、更に掬すべき稜々の趣味、有りたるが故也。渠れらの多くは實に、時に感じて節を賣り、見解を異にせんとする所謂小

格子の娼婦に近かる斗筭の文人なりし也其の言ふところいかさま鹿爪らしけれど仔細に觀來れば是れ文字なく智力なき娼婦の床の間に飾られたる英書に過ぎざるのみ足下常に是れを慨して恨みを買ふを辭せず椽大の筆を揮つて先輩と云はず知己と云はず苟くも其の爲すところにして文人の軌を脱するものは立ろに是れを罵倒して遺すところなかりしなり這箇の霸氣僕の正に足下に重きを置きしところのもの也。

嗚呼足下斯くの如き稜々の霸氣は實に足下の生命なりし也足下が文壇の呼び者となりて才名江湖に喧傳せられし所以のものは足下が「契冲阿闍梨」や「白樂天」等の評傳に筆を執りたるが故にあらず又「花紅葉」や「黃菊白菊」や是れら下らなき美文韻文をものしたるが故にあらずして實に以上の如き霸氣文字の上に萬丈の光焰を吐いて憚るところな

りしに因るこの故に足下なる者より這箇の霸氣を除く有らばやがて足下は空のみ零のみ死したる者のみまた何等取るところ有らざる可き也而も昨今の足下や即ち如何足下尙ほ未だ生きたる桂月君なる乎はた足下なほ未だ娼婦に近からざる桂月君なるべき乎足下が往日弄して止まざりし快文字は遂に是れ娼婦の床の間の英書に過ぎざる無き乎往日足下が罵つて措かざりし故乙羽は今足下が理想の人なる無き乎往日足下が嘲つて止まざりし所謂紳士足下が所謂物質社會に醒醒する紳士なるものはやがて今の足下が眼中の人なる無き乎敢へて足下に問ふ言と行とは一致し難しとは足下先づ是れを往日曲筆の徒を嘲つて而して今自ら是れを敢へて爲しつゝある昨今の足下に見るべきにあらずや。

嗚呼惜いかな文壇の奇矯兒大町桂月君は既に博文館編輯局に於て死

したり年未だ四十に至らずして早くも既に他界の人となれり由來才人の天折は珍らしき事にあらずと雖も斯くの如き才人の斯くの如き天折はまた其例を多しとせず嗚呼足下は實に地位と黄金とふ二大利劍の責めに逢うて脆くも遂に其の生命を斷たれたる也滔々たる文人何れもみなこの二大利劍の爲めに生命を失ふが如しと雖も而も氣力足下の如く旺んに言論足下の如く健なりし之士が徒らに他の斗筭の文人に伍して斯くの如き意氣地なき最後を遂げんとは僕つひに夢想だも及ばざりき嗚呼一たび死したる桂月君足下足下は遂に再び生さんとは欲せざる乎再び生きたる大に現今の文人を罵らんとは欲せざる乎足下は一たび死したるの人也といへども再び生さんと欲せば生き得ざるにあらず足下胡爲れを速かよ生き以て往日の意氣を回復し捲土重來の勢を以て長虹の氣を吐くことを圖らざる徒らに筆を曲げて

博文館の片隅に餘喘をたもつが如きは是れ豈に足下が事也と云ふを得んや敢へて一文を足下に與へてその反省を促す。

久保天隨に與ふ

久保天隨君足下足下學を赤門に修めて最も漢學に精通し加ふるに其の性旅行を好み到るところに詩あり文あり豪放の辭跌宕の想常に斗筭文士の間に一頭地を抜き正に我が文壇の精筆を以て見る可きものあり往年足下が其編輯を主宰して雑誌「新文藝」を發刊するや讀書界ここに足下が痛絶の文字を見るを得て頗るその前途に囑望するところあり而も其の強めて俗界の好尚に投ずるを欲せざるの故を以て昨年の秋これを廢刊したりと聞くに於ては僕そのあまりに天折に過ぎざるやを疑ふと共にまた足下が今日の地歩の爲めに願ふことを惜むと

ころ無くむば有らざる也。

是れを聞く、足下が文を行るや極めて迅速かの「漢文評釋」や「山水美論」や、或はその他書肆が文學士足下の名を冠して公やけにするところの雜書雜文、何れも筆一たび下れば二十枚三十枚の原稿立どころに成りて片々たる小冊子の如きは、足下が一日の勞力を以て優に是れが稿を脱し終へて、なほ綽々餘裕の存するありと、而して其のものすどころ多くは斯くの如きなぐり書きの跡を留めずして、何れもみな人をして其の苦心の末に成りたるを思はしむるに於ては、實に足下が神來の妙腕に敬服せざるを得ざる也。

天隨君足下、僕思ふに、足下は、少くも今日の文壇に於て、最も能く字を知れるの士乎。是れ恐らくは一人の僕の信するところに止まらずして、又廣くわが讀書家の信じて疑を容れざる所なる可し、其の一たび漢字

を以て文を起すや、縦横自在、何等の掣せらるゝ無く、何物に羈せらるゝ無く、奔放の筆、流れて而して止るを知らざるが如きの趣致を呈する者あるは、是れ正に足下が最も能く字を知れるが故ならずんばならず、然り、足下は實に今日の文壇に於て、少くとも最も能く字を知れるの士ならん也。然りと雖も、足下は知れりや、かの常に字を弄んで止まざるの徒は、いつしか遂に字に弄ばるゝの徒となりて、以て文に於て何等の成すどころ無きのみならず、偶々騒壇に煥發すべかりし才華をも、字の爲めに弄び了られて、一代の耻を後世の文學史に晒すもの多きことを、酒々たる操觚者流の中、斯くの如きみにくき最後を遂げたるもの、これを今の文壇に見てすら、其數渺からずとす、足下たるもの、自ら戒むる所ありて可也。

疑ふらくは、足下が文字に對するや、常に必ず眞摯の氣を以てせり、更

に大に疑ふらくは、足下また實に以上の如き字を知れるもの、通弊に犯されて遂に字の爲に弄ばるゝの士とありたりたるにあらざるなきや、思ふに足下近時の述作、徒らに多數の漢字を用ひて、是れを飾りたるもの多きを見れども、而も僕不幸にして、足下が著作の何れを繕くも、未だ文字以外、その才華の溢るゝが如きを見る能はず、然り、僕不幸にして、其の侷偏なる文字以外、未だ足下が才華の溢るゝが如きを見る能はざる也、其の作を讀みて未だ且つて縦横流るゝが如き奔放の趣きを認めざるは、あらざれども、是れたゞ實に文字のみ、然りたゞ實に侷偏難澁ある文字のみ、またこの文字以外、何等清新にして、跌宕の趣致を認め得ざる也、是に於て再び疑ふらくは、足下文字を弄ばんとして、却つて文字に弄ばれ、遂に其の擽となりて、詞藻の才宕率の氣、あらゆる是れらを奪ひ終はられたるにあらざる乎。

天隨君足下、夫れ内に眞摯の氣、熱烈の情、無くむば、其文如何に豪放の文字を列ぬるとも、未だ讀者をして感動せしむるに足らず、足下の如きは、近時むしろこの眞摯、熱烈の氣を失ひて、只管文字を弄して、是れに依つて、以て功を收めんとし、つゝ有るに似たり、斯くの如くんば、足下が十年一日の如く、斯文の爲に筆を執つて、措かずとせずも、其の勢に酬ふる江湖讀者の歎賞は、只だ依然、天隨は能く字を知れりとのみ、また他に何等云ふところ有らざる可きなり、斯くの如きは、斷じて誇る可き文士の事にあらず、足下冀くば、其の輕浮にして、何等得るところ有らざる可き、勞力を捨て、更に眞摯、熱烈の氣を養へ、以て最も忠實に、最も眞面目に、文壇の爲めに闘へべき也、斯の如くにして、廣く文字を用ゐなば、今日侷難澁の評ある、足下が文章も、またまさに明治文壇の大文字と化して、以て燦然たる光明を今日の讀書界に放つに至らむ、足下以て如何とな

す、敢へて一文を草して以て呈す妄言多罪。

大學出身の諸家に與ふ

大學出身の樗牛、桂月、竹風、蝶二、羽衣諸君、足下、足下等、夙に學を我が國最高の學府に修めて、嚴霜の晨、烈風の夕、孜々として倦むこと無く、書を讀み、道を修め、社會に立ちては博士學士の稱號を戴き、或は新聞雜誌に譯々の論議を縦横するあれば、或は講堂に立ちて、嚴正森肅、以て一代の師表たらんとするもあり、由來、頭腦極めて散漫にして、理性の研磨、深く至らざるものあるは、わが國の學者を通じての大缺陷なりとす、足下等この間に立ちて、最高の學府に理論の奧義を探り、以て明確の言議、精數の觀察、大に我が思想界に資するところあらんとす、足下等また我が學界に在らざる可からざるの士、僕等是れに對し最も尊敬愛慕の情を捧ぐ

るに吝なるものにあらざる也。

夫れ大に到れるものは、又大に到れる丈、けの襟度を有せざる可からず。かの因循姑息、曖昧模糊の間に、他人を排して己れ先づ榮達の地位を占めんとするが如きは、斷じて大に到れる士の事にあらざる可き也。是れ市井の無賴、然らずんば、無學何等の辨ずるところ無きともがらの事のみ、然らば何を以てか大に到れる士の襟度とは言ふや、他なし、須らく自己偏狹の考へを排して、大に門戸を開き、後進子弟を愛して措かざる、是れ大に到れる士の襟度也。自己の小榮達、小功名を度外視して、大に後進を誘掖し、以て是れが榮達の道を拓く、是れもまた大に到れる士の襟度也。小節や、小禮儀や、あらゆる是れらの繁瑣なる小倫理を棄て、更に大に國家を慮り、大に社會文壇を思ふ、是れもまた大に到れる士の襟度ならずとせず、その他數へ來れば十指を十たび更ふるも尙ほ盡きじと雖

も、要するに是れらのことは總べて大に到れるもの、襟度として缺くべからざるものならむ否、これ寧ろ大に到れりとして世人より尊敬を拂はれ、文壇より畏重を受くるの士が、その報酬として費す可き勞力ならずや、その是れあらざるの士を以て、何ぞ大に到れりとなして、尊敬し、畏重するの要あらんや。

翻つて思ふ、大學出身の諸君、足下、足下等まことにその學識に於て、大に到れるの士ならむ、はたその才能に於て、大に到れるの士ならむ、而かも學識と才能とが能く他に超絶して大に到れりとなすも、其の心事にして陋劣、徒らに猜疑と嫉妬とに富み、自己の榮達を圖るの外、他また一事をも思はざるが如くば、未だ足下等を以て品性高く秀で、才能兼備はる、吾人が所謂大に到れるの士也と言ふを許す能はざる也、乞ふ僕をして、姑く其の然るや否やを捨てしめよ。

先づ問はん、足下、足下等果して能く自己の小榮達、小功名を排してまでも、尙ほ國家を慮り、社會文壇を思ひつゝありや、足下等恐らくば然りと答ふるを得ざらん也、足下等の中には、曾つて椽大の筆を揮うて大に博文館を罵りたるの士が、一たび博文館に入りてまた以前の光焰を見ず、たゞ同館々主の意を損ねざらんことを勉めつゝあるものあり、又曾つて大に學校教師を罵りて、是れ大丈夫の事にあらずと放言したるの士が、一たび學校に教鞭を執りて、安樂に送る境涯の香氣さ忘れられ難く、往日の『快刀斷亂麻』底の筆を無殘にもボールドの蔭に收めたるものあり、みな何れも昔日國家を思ひ、社會を思ひ、文壇を思ひたるの士、一たび榮達(?)の地に坐して、その鋭鋒を收むる事、斯くの如し、足下等は今更に我れらは只だ冷靜に學理を思へば足れる也、國家社會を思へんは、他に其人あるべし、と辨せんか、僕その狡猾なる逃口上に感ず、と雖も、而も其

の生きたる辭書たらんことを冀ふの根性を憫まさんばあらず。更に足下等に問はん、足下等果して能く自己の猜疑を撤して、大に後進の子弟を誘掖し、是れを率ゐて、以てその榮達の途を拓かんことに勉めたるか、足下等恐らくば、又然りと答ふるを得ざらん也。察すらく、足下等大學出身の士、おほむね頭腦明確にして學理を咀嚼するには餘りあれども、惜しいかな、その多くは箱入育ち、お坊ッちやま育ちにして、未だ能く社會に翔翔して、大に應用の途を擴む可きの資にあらざる也。この點に於ては、むしろ獨學の徒に於て、その優れるを見る、即ち彼れらは處世に於て一種の機才を有せり、故に或は突然起つて、文壇の大家となるものあれば、巧みに世に處して、短日月の間に、足下等が收め能ふ丈けの功を收むるもあり、足下等常に是れを見て、心平ならず、以て借越となし、猜疑嫉妬、さながら蛇に對するが如く、狼に向ふが如くす、これを以て其の

後進獨學の子弟に對するや、嘲笑を以て抹殺し、不親切と言はんより、寧ろ或る一種の恐怖心を以て是れを迎へ、或はその己れより出で、己れを超絶せざるやを恐れ、或はその己れを道具として己れを飛び抜けんとするものにあらざるやを疑ふ、斯くの如きは實に小人の器量、士君子の共々膝を交ふるを耻づるところなり。雖も、足下等の多くは實に斯種の恐怖病、猜疑病に罹れるものなることを斷せずんばあらず。思ふに、足下等の言ふところは、おほむねカラ威張り也、コケ威し也、夫れ只だカラ威張りのみ、コケ威しのみ、口に筆に滔々盡きざる放言を公けにすと雖も、其の根性は實に以上の如きの恐怖心のみ、猜疑心のみ、また他に何物の存するなきなり、これを譬ふれば、足下等は猶ほ吠えかゝる犬を威す、非人盜賊の如し、恐ろしさ忌々しさに堪へざれども、逃ぐれば尙ほ凄まじく吠えかゝる恐ろしさに、或は手足を擧げ、或は木片を投げ

て、犬よりも一等高き人間てふ假面を楯に、四肢の戰慄に堪へざるまで、も、カラ威張りをする非人盜賊の如き也、其の圈點澤山の論文是れ、コケを威かさんが爲にものせられたるもの、みまた何等の恐るゝとみろ有らざる也。

大學出身の諸君足下、僕が足下等を戒しめんと欲するところのもの、はい以上の如し、なほ細節に亘りては、他日大に論ず可きの期あらんが、要するに足下等は帝國最高の學府に書を讀みたりと高言するの人とし、ては、あまりに學者の襟度に乏しく、あまりに無學何等の辨する無き市井無賴のどもがらに近く、あまりに吠え付く犬を、コハ、威かす非人盜賊に近し、足下等の學識が幼稚なる日本の學界に於て比較的進歩せることは僕と雖も是れを認む、はた足下等が常に比較的深遂なる學理を紹介しつゝある功勞は僕と雖もまた是れを認む、而も是れあるが故

に足下等は我國の平民社會に對して、しかく威張り、しかく恩に着せ、而して、しかく後進の士を眼下に見下さるべからざるか、僕は信ず、足下等或は今日の社會に必要ならん、而も足下等が學びたる學なれば、とて、常人の學び得ざるの理あらんや、今日の社會は、しかく足下等に威張られて、までも、尙ほ足下等の必要を感ずるほど、人才に乏しき社會にあらざる也、何を以て思慮偏狹、傲岸自尊なる足下等を以て、大に到れるの士となして、尊ばざる可からざるぞ、敬はざる可からざる、曩に僕が足下等に尊敬愛慕の情を捧げざる可からずと論せしは、是れ未だ足下等の品性を論じ、襟度を論せざる以前の足下等なりし也、足下等の品性を論じ、襟度を論じて、尙ほ未だ足下等に尊敬愛慕の情を捧げざる可からず、とならば、僕遂にこの國の煩はしき論壇に筆を執る能はず、速やかに去つて、谿谷の間に麋鹿を友として、自ら慰むるあらん而已。

正岡子規に與ふ

正岡子規君足下、時今や春に入りて、鶯語滑に、百花紅に、根岸、巷頭、また、一味、春色の掬す可きものあるを見ん、足下この好期を病褥に垂れ籠めて、宿痾いよいよ重く、僅かに令妹を近づけて、自己の作句中後に傳へて耻かしからぬものを選び、刻一刻に死期の近づくを待ちつゝありと、嗚呼、何ぞ事の慘なるや。

察するに足下が明治の俳壇に致したるの功績や實に偉大なるものあり、かの元祿の時代に於て、芭蕉の徒が斯道の宗匠と敬はれて、みだりに人を誘ふの想、人を威かすの辭を以て、時の俳壇を風靡したるより以來、俳句は愈々卑俗に流れ、趣味を失ひ、まゝ其角嵐雪の亞流を汲むで、晦澁の想を舒べ、凡庸の辭を聯ねて以て得たりとなすの徒、多く斯壇にはび

こり、滔々斯くの如くにして、昇平幾百年遂に明治に入りて、尙ほ未だ月並調猖獗を極め、益々八方へ其勢力を張らんとせり、足下幼にして俳を内藤鳴雪等に學び、深く心を是れに潜めて研究を怠らず、遂に月並調の唾して棄つ可きを悟り、是れに反して蕪村の句が彼等凡庸作家に比し、嶄として一頭地を抜けることを信じ、爾來孜々として蕪村の紹介に勉め、其の句の詩的價値を論じ、百年の久しき葬り去られたる蕪村句集を講じて、大に其の美的趣味の發展に盡し、自らもまた虚子、碧梧桐等全志の士を糾合して、蕪村風の句を公けにし、俳句ここに於て始めて詩の境に入れりと絶叫するや、在來月並調の跋扈に對して、不滿措く能はざりし、青春の士、翕然として足下の堂に集まり、蕪村を研究し、蕪村を崇拜し、極力月並派の向ふを張りて、苦闘すること、茲に多年よしや未だ俳壇の悉くが足下の門に入らずと雖も、而も眼あるの士が何れも舊來の固陋

なる俳句を唾棄し、進んで清新にして廣濶なるほど、ぎす二派に加はらんとするは、正に斯道革新の傾向、この短日月の間を以て全く作られたりと評して可なる可き也。

而して足下、この大なる勢力の多くは、殆んど一人の足下に因つて作られたる也、然り、實に足下が忠實に因りて作られたる也、忠實なるかな、忠實なるかな、僕等は今日の文壇に於て、某氏の如く、嘗つて幾分革新の精神を有せしも、其の言ふところ忠實を缺き、其の行ふところ忠實を缺き、輕佻浮薄、而して更に尊傲自大、みだりに山を張りて、人を威かし、徒らに法螺を吹いて世をくらまし、遂には其の成るべきの功を自から半途に棄て、罵詈訕笑の中に立つて今や殆んど社會的死を遂げんとしつゝあるを見る、斯くの如きは口に革新を説き筆に革新を論ずるも、而も成功の最大要件たる一の忠實を缺きては、其の大呼や、絶叫や、偶々自己の

人格を損するに過ぎざる也、是れを足下に比す、其相距る何う遠きや、思ふに足下斯道に盡くすこと十年一日の如く、其間いさゝかの山氣無く、空末の慾念を止めず、一意に斯道の前途を計りて、客觀を説き、具象を論じ、大に寫實の美を發揮して、頻死の境に陥りて尙ほ未だ怠ることなく、口辛うじて作句中の粹を授けて令妹に筆記せしめ、以て現世「ほど」ぎす派の本領主張を誤らざらしめんことに努めつゝありと、嗚呼、是れをこれ忠實と云はずして將た何と云はむ、かの某氏の如き最後の社會的[△]死は、是れ[△]うの[△]不忠實[△]に對する[△]必然[△]の結果[△]にして、足下[△]が[△]最後[△]の[△]病[△]死[△]は、是れ[△]その[△]忠實[△]に對する[△]偶然[△]の[△]災難[△]也、足下[△]が[△]近狀[△]を[△]聞く[△]もの[△]、憂ひて而して感ぜざる無き、豈故なしとせんや、

正岡子規君足下、足下がわが文壇に翻へしたる俳句革新の旗幟は、今や殆んど我國の津々浦々までを風靡したり、人心おほむね足下の麾下に

歸向して、また他意あらざるが如し、而して俳句革新の實は茲に殆んど
 擧れる也。足下が年來主張して措くところを知らざりし詩的俳句は、今
 やわが全國の到るところに讀まれ、究められ、而して作られ、月並調一派
 の俗宗匠は殆んど茲に顔色を失ふに至れり、今後の俳壇は假令足下を
 失ふも進歩發達せん、況んや鳴雪、虛子、碧梧桐等同志の士何れも足下の
 機關雜誌「ほととぎす」に立てこもりて、益々廣く、益々深く、足下が主張し
 て措かざりし所謂新派の俳句を鼓吹しつゝあるに於てをや、俳界前途
 の隆運正に大に見る可きものあらん、足下たるもの從容死に就くを得
 べけん也。

廣津柳浪に與ふ

廣津柳浪君足下、敢へて問ふ、足下は今何を爲しつゝありや。

曾つて「今戸心中」をものし、「河内屋」を著はしたるものは足下にあらずや、
 其の取材範圍實に或る闇黒の一局面に限られたりと雖も、而も紛糾せ
 る幾條の葛藤を、劃然一條づゝに區別して、個々の性格、驚く可き計りに
 鮮明ならしめたる其の描寫の手腕は、紅露二氏と雖も未だ俄に及び易
 からざるの技を有すと傳へられしものは、實に柳浪君足下に非ずや、こ
 の手腕を有するの足下、今果た何を爲しつゝありや。
 由來短篇は足下が得意とするところにあらずと聞けり、然り、是れ實に
 然り、足下が本年二月の「新小説」に掲げたる「雪の夜がたり」の如き、連筆の
 流暢なるは、流石に足下が作としてほゞ悉まるゝ所ありたるも、而も
 其の取材の平凡にして、陳腐なる、僅かに是れ三面雜報を敷衍したるも
 のに過ぎず、足下が長所は、寧ろ多數の人物と短かゝらざる時間とを用
 ゐて、明細に深刻に人情の機微を寫すもの、實に是れなる也。

是れ實に足下の長所也。この故を以て足下は「河内屋」に成功し、他もつれ
 糸「骨ぬすみ」「目黒小町」等に於て大に世の喝采を博したる也。而もこの
 妙腕は今に至つて尙ほ是れを持續しつゝある乎。かの萬朝報紙上に表
 はれたる「墮落」や「自暴自棄」や、實に是れ前後三百餘回に亘るの長篇なり
 と雖も、僕等の是れを讀みて感したるは、只僅かに筆に瑕瑾なきの一事
 にして、もしよく仔細に觀察せば、全篇を通じてなぐり書きの場所多く、
 また往日の深刻悲涼の情致人を動かすに足るもの不幸にして、其の一
 つだに見出すを得ざる也。足下遂にかの種の靈腕を失ひたる乎。否、僕を
 して是れを言はしむれば、足下は徒らに其の才を恃みて眞面目を失な
 ひたる也。名を弄びて遂に濫作に流れたる也。
 柳浪君足下、才子才を弄んで遂に其の才に躓く。是れ蓋し足下の謂乎。足
 下たるもの須く眞面目に反へり、着實を旨とし、以て往日の靈腕を再び

揮ふ可き也。是れを望んで已まざるもの、豈に一人の僕のみならんや。

小栗風葉に與ふ

小栗風葉君足下、足下新春に入りてもものすどころ、僕新小説に「覺醒」を見
 アカツキ三梢の花を見たりも、とこれ足下慣用の構想、肉に執着せる青
 春の男女が、肉より解脱せんと欲して苦惱煩悶する懊惱の狀を寫せる
 もの、筆や益々圓熟して、材や益々古りたるもの也。是れを往年足下がも
 のしたる「寢白粉」に比するに、僕その運筆の僅に進歩せるを認むるのみ
 にして、未だ足下が觀察する取材の眼光の少しも他方面にきらめくを
 認めざる也。足下新たに他に向つて筆を走らすに意あらざるか、將た思
 ふどころありて、ことさらに是れを敢へてせざるか、僕足下の意の那邊
 にあるかを解するに苦む。

風葉君足下、人は足下が解釋する如く、而く肉に執着して止まざるものなる可き乎、人の肉に向ふ、足下が思ふところの如く、あらゆる功名をも、あらゆる學識をも、是れを犠牲に供せずんば止まざるものなるへき乎、聞く、足下が詩文を草するや、其の對象とするところのものは、美にあらざる、善にあらざる、美よりも更に高く、善よりも更に大なる眞にありと、足下果して「眞」を以て足下が詩文の對象となす乎、あらず、足下果して美を求めず、善を求めず、唯うれ「眞」を求めむるに汲々として日も尙ほ足らざる乎、然らば僕足下に問はん、足下「眞」を對象として果して何を描きたるか、足下「眞」を求めて果して何を得たるか、思はざりき、執着蛇の如く、肉を追ひまくるの人を以て常に詩文の材となしつゝ、ある足下が口より、我れは美を求めむるにあらざる、善を求めむるにあらざる、只うれ眞を求めれば足れるのみと聞かんとは。

風葉君足下、忌憚なく言はしむれば、足下は未だ覺めざるの人也、是れ今日の詩人としては可、而も口苟めにも「眞」を求めんと公言する足下としては斷じて不可也、足下は未だ足下が迷より覺めず、而して「眞」を求めんとするも、「眞」たるもの夫れ何處にか足下を待たん、思ふに毎篇足下が小説の主人公たる、極めて強く肉に執着するの男女は、是れやがて、極めて強く肉に執着する足下が化身ならん也、然り、毎篇の彼れ等は、常より作者の影法師となりて、須臾も是れと相離るゝの時あらざる也、夫れ大蛇の如く、小蛇の如く、常に執着してゐる物を望まんとするものは、未だ大に迷へるものにあらざるや、苟くも「眞」を求めんと欲せば、速かにその迷ひより覺めざるべからず、靜かに黙して其の頭腦を修め、冷かに探りて、漸くに「眞」は求めらる可き也、かのみだりに聞え、徒らに惱むの徒が、假令幾十年幾百年の間を悶え、悩みたればとて、「眞」果していつの日か其の手

に依つて探られん、斯くの如きはむしろ是れ「眞」を求むるにあらずして、徒らに悶えんが爲めに悶え、惱まんが爲に惱むもの、其の得るところ、足下果して如何となすぞ。

風葉君足下、足下まことに「眞」を求めんが爲に懊惱する乎、然らば何ぞ速かにその迷より覺めざる、今の如き足下の態度はむしろ是れ「眞」を求むるにあらずして「悶えんが爲に悶ふるの態度也」。「美」は或は其處に足下の爲に探られん、「肉」は或は其處に足下の手に依つて究められん、而かも足下が目的とする「眞」は到底求む可くもあらざる可し、或は足下、是れを以て、我れは迷へるもの也、必ずしも「眞」を求めんと欲するものにあらず、わが行く途に於て「美」を探らば我れは大に是と握手せん、更に「肉」と逢はば我れは喜んで是れと抱合せん、われはたゞある物を求めれば足れるのみ、と言はんか、斯くの如くんばむしろ當初より「眞」を求めざるの優れるに

如かざる也。

風葉君足下、然りと雖も懷疑は是れ「眞」を求むるの途に於て、當然人の躓く可き要障也、足下が肉に執着し、美に憧憬するも、また必しも咎む可きの事にあらず、唯だいつまでも懷疑の境に彷徨して、當初行かんと欲したる途を誤る如きは痴の極也、足下の賢、決して茲に出づる無きは、僕之を信すと云へども、而かも其の餘りに覺めやうの遲きを見ては、聊か怪訝の念無きを得ず、冀くば足下速かに覺めて直進せよ、覺めたる足下の前には、必ずや「眞」の開展せらるゝ、あらん、足下ここに座して靜かに理を思ひ、「眞」を考へなば、足下が求むるところの「眞」の理は、自らにして足下が胸の靈絃に響かん、茲に於て足下尙ほ悟るところ、無くんば足下は眞の痴漢なる可き也、風葉君足下、僕が今の足下に望むところ、略ぼ以上の如し、只速やかに其の迷より覺めて、肉を離れ、美を離れ、更に最も自由にい

て最も高濶なる「眞」の大天地に、縦横翔翔し、以てその八絃鳴るが如き、腕を振はんことを望む、妄言多罪。

小杉天外に與ふ

小杉天外君足下、足下が寫實小説と冠して出版するところ、僕前には「はつ姿」「女夫星」及「戀と戀」を見、今また新著「はやり唄」を見たり、「はやり唄」は未だ精讀の機を得ざれど、前の三者は僕最も是れを熟讀したり、因て思ふに足下が所謂寫實小説なる意義、及足下が今日の文壇に對する態度、足下が今の評壇に懽焉たらざる所以のもの、共に極めて曖昧にして、未だ他をして察せしむるに足らざるに似たり。

天外君足下、書肆の廣告するところに依れば、著者は其眼、これを美と認めたるどころのもの、は假令閑中の痴話と雖も、細大描寫して洩らさるるは無しと、僕初め是れを見て思へらく、是れ猾奴人目を曳くの手段、著者が寫實の意義何ぞ茲にあらんやと、即ち購ふてこれを讀むに、闕らざりき、かの書肆の廣告の過たずして、篇中到るところに醜汚の言行盛んに寫し出され、徒らに讀者の實感を挑發せしむる底の文字、終始を貫いて列べられ、讀了の後、腦中何等美の感想の印象せらるゝ事、あくして却つて不快の感想を購ふのみに過ぎざらんとは、斯くの如くんば、足下が所謂寫實小説なるものは、かの西鶴、春水の輩か、戲筆にかゝる繪草紙なるものに劣るども、斷じて優るところあらざる也。

天外君足下、夫れ今日の社會は極めて不完全なる社會也、否、極めてみにくき社會也、かして一人の男ありて、純潔雪の如き處女を翻弄し、脅迫し、殘忍到らざる無きものあれば、こゝに一人の女ありて、まだ塵に、とまぬ少年をたぶらかし、煽り立て、斯くして其の生血を吸ひ取らずんば

止まず、或はかしこに、一人の老婆ありて、艶麗花の如き乙女を欺き偽り、斯くして己が懷を肥やさずんば措かざるあれば、ここには又一人の老人ありて、黄白を撒き散らし、腕力を楯として、彼女が貞操を犯かさんが爲情慾の爪を磨ぎつゝあるもあり、或は戀の嫉妬に、ひうかに九寸五分の短刀を磨するもあれば、或は又金錢に、眩まされて、操を賣り身體を賣る人の妻も少きにあらず、斯くの如きは今日社會の常態也、僕等が眼に映するところの多くは斯の如き社會也、足下是れを以て、敢へて欺すべしとなさいるか、何爲れを夫れ筆を執つてこのみにくき社會を摘發し、このみにくき人間を直寫せんとはする。

足下が藝術に對する態度は甚だ曖昧也、足下が毎篇の卷頭に置くところの朦朧にして讀者をくらまさんとするが如き、其の序文は暫く是れを措いて問はず、足下がものすところの小説に就て是れを觀るに、足下

は前記の如き社會を有りのまゝに直寫して、是れを飾るに豊麗なる文字を以てせるもの、是れ自然也、是れ藝術也、是れ詩也、となせるか、書肆は常に足下を辯護して、著者が美と認めたる閑房の痴話を直寫するに、何等か藝術の掣肘を受けんやとなせども、閑房の痴話を真寫して是れを美となすが如き、果して喜ぶべきのことなるべきか、足下が藝術は前述の如きみにくき社會を有りのまゝに寫せるもの、是れなる也、足下が寫實小説なるもの、意義、また是れにして、やがて社會の闇黒の方面のみを直寫せんとするの意義なるべき也、嗚呼、足下、斯くの如き直寫主義は藝術の大目的に違ふのみならず、足下は抑も是れを以て、今日の社會に何等の貢獻をなしつゝありとするや。

天外君、足下、足下知れりや、今日の人間は最もよく、足下が著書を好むの人間也、やがて言ひ換ふれば最も淫猥なる小説を愛し、最も實感を挑發

せしむ可き詩文を好むの人間也。足下夙にこの弱點を看破し、寫實主義の名を標榜して以て極力現代社會の惡現象を直寫するに勉め、西鶴、春水の輩すら言ふを憚かりし文字を忌憚なく振りまはし、以て多衆好色の輩の喜ぶところと成らんと欲す。是れ足下として可也。而かも今の社會を如何せんとする、今の文壇を如何せんとする、吾人は信せんとする。足下の著書が一部多く賣れる丈、夫れ丈、墮落せる國民を増殖したるものなることを。

天外君足下、足下が藝術に對する態度は斯くの如しと雖も、斯くの如きが果して藝術の目的也とは、足下も亦恐らくは斷するに憚るところあるべし。よしや口には是れを敢てするも、衷心必ずや然らざるを覺ゆるものありむ。直寫可也。然りと雖も、ことさらに筆を奇怪なる方面に曲げて、人心をたぶらかし、以て釣り込まんとするは、斷じて不可也。詩人は自然

を摸倣せよ。しかも能く自然の上に出でざる可からず。とは希臘以來、世々の美學者が詩人に誨ゆるところ。至言と言はざる可からず。唯だ徒らに自然を摸倣し、直寫するのみならば、是れ單に寫眞師のみ。また何處にか、詩人の面影を認め得んや。足下願はくは深く省みて、其の自己の藝術が、むしろ寫眞師の技術に近からざるやを思へ。妄言多罪。

中村春雨に與ふ

中村春雨君足下、足下の著「無花果」の上梓せられて市に頒たるゝや、人皆な目を聳て、曰く、是れ誰れの著ぞや、何大家のものすところぞや、何ぞ其の觀察の精密にして、行文の流暢艶麗共に至れるものあるやと、而も其の一専門學校の學生たる足下の著にかゝるを知るに及んでや、人みな、嗚呼、才人の麗筆に感じて、足下が斯道に於ける妙技をたゞえざる者

無く爲に足下が盛名隆々として、まことに旭日東天の觀あり、一専門學校の學生たる足下は、實にこゝに一躍して文壇作家の域に上れり、足下の得意思ふ可き也。

然り、足下は實に一躍して文壇作家の域に上れり、これを以て足下爾來「國民」に讀賣にはた「アカツキ」に、或は長篇をも、或は短篇を著して、我々倦むところを知らず、而も其作いづれもみな在來の小説以外、一特色を有して、趣味の清新、措辭の流麗、今の所謂大家なる諸士の到底企て及ばざるの妙所を有するものあり、足下の神才、實に恐る可き也。

春雨君足下、然りと雖も、猥りに人をおだて、乗り氣にならしむるは、敢へて僕等が事にあらず、足下實に今に於て今の如きの令名を有し、また足らざるところ無きが如きも、而も世に往々才を持んで自ら其の才に墮き、以て終生掩ふ可からざる大失態を演ずるものあり、足下の如きは

斷して斯くの如きにあらずと雖も、而も年齒未だ壯、或は又功名の巻に迷うて、前途の方向を誤り、以て徒らに世の嘲笑を買ふが如きこと、豈必ずしも之れ無きを保す可けんや、願はくば静かに修め、静かに勉め、而して其餘力を以て静かに佳作をものせんことを心せよ、かの焦ちて濫作を事とし、小さき功名と小さき才能とを弄ぶが如き、豈是れを才人の事と云ふを得んや。

春雨君足下、世は足下を賞し、足下をおだて、足下を持ち上げて止まざるの今日、僕ひとり斯くの如きの言を寄するもの、敢へて徒らに辯を好むか、故にあらずして、又衷心實に足下が前途を慮るもの有るが故也、殷鑑遠からず、田村松魚にあり、足下たる者三省して可也、多罪。

田村松魚に與ふ

田村松魚君足下、僕足下に就て多くを知らず、只だ足下が幸田露伴の高弟なると、曾つて新小説に「磯馴松」ある一篇を寄せて、第一等に當選したると、其後博文館に入りて三宅青軒等と共に文藝俱樂部の狂句狂歌選評の任に當りつゝあると、客年大坂毎日新聞大懸賞の際足下また一篇を寄せて落選したると、凡う僅かに是れらを知れるのみ、他別に足下に就て知るところ有らざる也。

然れども足下、足下が「磯馴松」に當選して、心や、慢り、其後新小説に文藝俱樂部に續々小説をものしたるの際、足下の名聲忽ち揚りて、讀書界また松魚の名を知らざるもの無きに至りしこと、是れなほ僕が記憶に残る所也、而して僕が記憶は是れに止まらず、更に足下の名を聞く毎に、嘗つて帝國文學記者(?)が、足下と薄田泣菫とを以て文壇の二天才となし、

その天才を益々研磨して、方めて邪路に迷はざらんことを切望したるを聯想せざるはあらざる也。

松魚君足下、足下は果してかの帝國文學記者の切望せりし如く、よく邪路に迷はずして、其の「天才」を研磨しつゝある乎、足下と共に天才と稱せられし薄田泣菫は、今浪華の地に在りて雑誌「小天地」を發刊し、大に關西の文運を鼓吹する傍ら、優麗の筆を韻文に染めて、清新の想、幽婉の調、共に今の騷壇を風靡しつゝありと聞く、而して足下は、今如何の態ぞ、否、足下は、今何をなしつゝあるぞ、青軒一輩の徒に伍して、醜雑誌の編輯をなし居れりとは、僕曾つて是れを聞きぬ、妻を娶つて生計の道に追はれつゝありとは、僕又是れを聞きぬ、而も足下が其の「天才」を研磨して、大なる貢獻を文壇に捧げたりとは、僕寡聞にして未だ知るを得ざる所、幸にして當年の「天才」足下が近況を詳かにするを得ん乎。

足下、本年新春の文藝俱樂部に言へらく、「少しばかり進んだかと思ふものは、近眼鏡の度と晩酌の酒の量位のもの」云々と云へり、是れ素より幾分謙讓の言なる可しと雖も、而も吾人は足下近來の態度に鑑みて、寧ろ其の言の謙辭ならずして、眞に足下の眞實を告白せるものと斷せざる可からざるを如何せん、借問す、帝國文學記者及び僕等の一同は、天才松魚君足下に望むに、近眼鏡の度と晩酌の酒量のみを進めんことを以てしたる乎、足下恐らくは然りと答ふるを得ざる可き也。

松魚君足下、夫れ天才は容易に得べきところのものにあらずと雖も、而も汝々怠るなく是れを研磨せば天才の出現の左程に困難なるものにあらず、徒らに小名譽を振り廻はし、小逸樂に安んじて是れを研く事を敢へてせざらば、幼時の神童も亦まさに凡骨に化す可きのみ、足下箇中の觀易き理を辨せへず、僅かに一小博文館に雇はれ、進むことを知らず、

研くことを勉めず、往には到るところより希望の聲を放たれし筆を收めて、三宅青軒の徒に願使せられ、館主の爲に筆を曲げ、而して滔々たる二十過ぐれば並の者之間に加はる、嗚呼、是れ果して足下の意乎、僕今に於てむしろ彼れ帝國文學記者が、足下を叫んで天才となしたる、淺薄の批評を嘲らざるを得ず、吾寧ろ僕自身世の衆俗に和して大に足下に囑望するところありし、往昔の無見識を愧ぢずんば有らざる也。

松魚君足下、足下が師露伴は稀代の文豪、一世の師表たり、足下今是れを棄て、かの幫間文士三宅青軒の輩と交はり、悉く其感化を受けて、また其の師の面影を認む可くもあらず、斯くても當年の「天才」足下はなほ自ら省みて耻づるところ有らざる乎、足下を思ふ足下の師の恩はまことに山嶽よりも高く、河海よりも深きものあり、是れに酬ゆる足下の第一義は、先づ其の迷夢より覺めて、眞摯なりし往昔に反るにあり、敢て足下

の猛省を促がす。

尾崎紅葉に與ふ

尾崎紅葉君足下、足下が我が國の文壇に貢献するところの大なるは是れを足下が過去の精勵に就いて見るも明らかなる事實にして、今に於て僕が事新らしく論せんは、むしろ其の迂に近かる可きを信ず、「三人妻」を著はしたるも足下也、「不言不語」を作りたるも足下也、おはよろ斯くの如き述作が、我國の騷壇に如何ばかりの彩華を飾りたるかは、世既に定評ありて又僕の絮説を要せざるところ、何ぞこゝに贅するの要あらんや、而して僕の足下に於て最も功勞の大なるものどかすは、實に足下が多衆の秀才を其の門下より繪出せしめて、何れも夫れど、文壇に翩翩せしむるに至りたるの一事也とす、かの風葉や、鏡花や、春葉や、秋聲や、是

これらの秀才は皆すべて足下の門より出でたる者也、然り、今日の文壇に於て、はゞ一家の見識を具へて、儼に獨歩し得るに至りたる渠れらはすべて足下が門より出でたる也、是れを其門下より何等才人を出すなかりし幸田露伴に比するに、足下が今の文壇に盡したるの勞や、實に赫として明治文學史中一頭地を抜くものたらずんば、非ず、今日の文壇は、まさに足下に向つて、多大の感謝を拂ふて可からん也。

然り、足下が今日の文壇に致したるの功は、夫れ斯くの如く大也、然りと雖も、僕も僕も信ず、足下が今日の文壇に致す可きの事は、未だ以上を以て決して盡されたるものにあらざること、夫れ大なる者は、其の大なる丈、け他人を超えて重責を負ふところ有らざる可からず、これ大なる者、當然の責任、足下たる者、又まさに辭せずして負ひて可ならん也、足下の門生、今や何れも文壇に重きを置かれて、又足下を要せざるに似たりと雖

も、是れ未だ深く思はざるの論のみ、足下は記せよ、今の社會は實に冷酷なる社會、忘れつばき社會也、雖も、而も足下の門下生の才藻に眩暈して、また足下を顧みざるが如き、而く冷酷にして、忘れつばき社會にあらざることを、更に記せよ、今日の讀書界は、足下が門下生なる、小さき足下の才藻に敬服して、以て文壇の珍として、尊ぶと雖も、而も更に大なる渠等たる足下の作物を翹望して止まざることを。

僕豈にみだりに足下をせついで、急作、濫作、凡作を續出せんことを冀ふものならんや、思ふにわが讀書界の凡べても亦しかく願ふものなる可き也、たゞ夫れ、足下に望むところは、斯くの如きの才人を養成したるの故を以て、氣散り、心高ぶり、我れまた文壇に要あらんやと、なすが如き事無く、功成るに従つて、益々修め、愈々勉め、其の子弟を督勵するの閑を以て、自ら大に筆硯を研磨して、汝々倦むところ無く、述作に勉められんこ

と、是れ也、足下はまさに永久、従前の精勵を心として、以て斯壇の爲めに盡すところ有る可し、其の足下をして多く作れ、濫りに多く作れと呼ぶが如きは、斷じて足下が事ならず、又斷じて文藝の事ならざる也、たゞ精勵、たゞ刻苦、これを足下に望まば、足れるのみ、足下了するどころあるや否や。

斯くの如くにして、着實に眞面目に文壇の爲めに盡すところあらんか、足下はまさに一代の師表として、社會の畏敬を受くると共に、また以て文藝に對する無比の忠實者として、其の名後代に赫々たらん也。

紅葉門下の諸子に與ふ

尾崎紅葉門下生、風葉、鏡花、春葉、秋聲、荷葉、諸君、足下、足下等、夙に文を紅葉先生に學びて、巧みに師の長所を取り、うの短所を補ひ、以て各々一家の

體を創めて、夫れく造詣するところ有り、才名やうやく江湖の知るところとなりて、騒壇新たに五彩の花を添ゆ、思ふに是れ師の薰陶その宜しきを得たるに因ると雖ども、また足下等にして才藻の豊富、筆致の雅麗、斯くの如きにあらずんば、焉んぞよく茲に出づるを得んや、是れを足下等の師尾崎紅葉の好敵手幸田露伴の門下生と比するに、かしこには松魚、夕颺、鶴伴、新泉の徒、何れも筆硯を弄して得たりとなすと雖も、其の筆路の澁滯、取材の陳套、以て足下等の靈腕に比す可くもあらず、たゞ徒らに筆を噛みて焦慮するのともからのみ、足下等及び足下等の師尾崎紅葉君の得意、思ふ可き也。

風葉君、足下、足下に就いては別に書を興へて是れを論ずるところあり、茲に贅するの要あらじ、たゞ足下に就いて今一言の議すべきあるは、足下の人格品性に就いての問題也、是れ世の批評家の、夙に足下を戒めて

止まざりしどころのもの、而も聞くが如くんば、足下未だ自ら悔むずして、其の行蹟ますく、亂れて修まるところ無しと、由來文士の徒、常に素行修まらずして世の譏りを買ふもの多し、而かも是れあるの故を以て文士の特性也となすが如きは、其の過ちをして更に甚しからしむるに至らん也、今や足下の才名江湖に喧しく、到る所に足下を歡び待たざるはなし、足下青春の客氣に驅られて、ツヌボレを起し、乗り氣になりて、益々その品性を傷くが如きあらば、遂にはその名を傷つけ、その家を破り、延いては累を足下の師紅葉にまで及ぼす可き也、足下たるもの、其本に反へらざる可からず。

鏡花君、足下、足下幽婉の想、靈妙の筆、江湖を驚倒し、文壇を振蕩せしむること既に久し、新年に入りて見るところ、單行物としては「三枚續」新小説に掲げられたる、女仙前記の二、前者は曾つて大坂毎日新聞に出したる

ものなりと傳ふ、凄婉の筆致、複雑なる人情界の葛藤を寫して、是れを點綴するに意地と戀とを以てせるもの、材は新らしと云ふにあらねど、足下が敏腕は是れをしも面白く讀ましめぬ、近來、足下が作を以て晦澁なりとし、朦朧なりとし、不自然也、とあるものあり、是れ無學詩を解する能はざるの徒にわらずんば、弦齋、霞亭の小説に心酔してまた他あるを知らざるのやからのみ、足下毫も是れを意に介せずして可也、足下が作、不自然は不自然也、而もかの寫實小説ある文字を標榜して、徒らに世俗の醜體を寫し、男女の痴話を記して、更に何等の理想なく、想像あき、某々一輩の所作に比し、崇うして優れること、そもいくばくぞや、足下幸ひに安んじて可也。

春葉、秋聲、兩君、足下、僕未だ多く足下等の作を讀まず、たゞ春葉君の「夢の夢」、秋聲君の「雲のゆくへ」僅かに是れを讀みたるのみ、然り、僅かに是の二

卷の小説を讀みたるに過ぎずと雖も、而も是れを以て未だ足下等が伎倆を窺ふに足らずとせんや、「雲のゆくへ」は材を執拗なる令嬢に取りたるもの、境遇と性格と戀愛と夫れ々劃然と描き出されて、優秋聲君にの伎を見るに足る、殊に僕の最も感じたりとなすところは、叙景の筆の精細、神に入れるにあり、是れ今日文壇の珍也、「夢の夢」は是れ一部の探偵小説か、その取材、筆力、共に「雲のゆくへ」に比して劣るもの有り、雖も、而も流暢にして厭味なく、讀むに骨折れずして倦むことを知らしめざる、是れ遂に秋聲君の及ばざるところならんか、とまれ、何れも筆に神味を帯びて、將來の成功期して見る可きものあり、勉めて怠らすんば、風葉、鏡花等の壘を摩するに至る、蓋亦難きにあらざるべし、只だ夫れ多く作りて、多く思へ、成功は近き將來にあり。

其地、荷葉君以下の所作に至りては、未だ多く世に現はれず、随つて其の

名江湖の喧傳するところとならずと雖も、何れも述作に對する才氣の非凡なるは、二三の新聞雜誌に見る零語斷片に就て明らか也。是れまた將來に於る成功期して待つべきものあらむ。

尾崎紅葉門下生諸君足下、足下等が人間社會に對する燃ゆるが如き犀利の觀察、流るゝが如き艶麗の筆致、或は師の長所を學び、或は師の短所を補ひ、一作は一作より進歩し、一著は一著より發達して、以て大に我國の文壇を飾るに足るものあり、是れ眞に足下等が師に對する報恩の第一義、牛門の美風、おのづから掬すべきものあるを見る、足下等は知らむ、師の其子弟に對するや、怙恃骨肉も尙ほ末だ及ばざるの情誼と苦慮とを以てすること、足下等の師紅葉君が足下等に對する情誼と苦慮、また實に斯くの如し、足下等各々感泣して益々奮ひ、益々勉めて牛門の才人おのづから他を抜くものあるを知らしめざる可からず、自己の

稍や匍匐し、獨立し得るに及んでは、また師を要せずとなし、是れを捨てて顧みざるが如きは、思ふに足下等が事にあらずと雖も、斯くの如き忘恩の所置は、かの三日養はれて云々の犬豕に於て尙ほ且つ耻となすこと、足下等に於て斷じて是れある可からざる也、僕なほ足下等に向つて一言の進む可きものあり、他なし、聞くところに依れば、牛込の才人、其の才を弄して、不羈蕩佚、止まるところを知らずと、是れ思ふに今日社會の定論なるが如し、僕敢へて、足下等の凡べてが斯かりと信ずる者にあらずと雖も、斯くの如きの世論を招くに至りたるは、必ず其因なくばあらず、足下等冀くば一に其の才を研いて、文筆を鍊るを怠らざると共に、更に大に師の素行を謹み、品性を陶冶し、以て一方、文筆に於て所謂詩人の筆を磨き、其に更に、更に、他方に於いて、所謂詩人の人格なるものを象らんことを勉め、不羈蕩佚を以て、詩人の品性也、人格也と、揚言して、

らざるが如きは、断じて牛込先生門下生諸君の事にあらざるべき也。

幸田露伴に與ふ

幸田露伴君足下、足下及び足下門下生の近時、何ぞ夫れ寂びたるの甚しきや、是れを先づ足下に就いて見るに、足下近時の文章性行一として、五重塔を作り、さゝ舟を著はしたる當年の麒麟兒幸田露伴のれもかけを認め得るもの無し、更に是れを足下の門下生に就いて見るに、松魚夕鷺、鶴伴等の徒、何れも懶惰に耽り、小才を弄して、つゆだに文壇の爲めに功勞を致すところ有らず、何れも足下と共に眠り、足下と共に怠りて、未だ往年の足下を倣はざる前に、先づ今日の足下を倣はんとしつゝあり、斯くの如くにして、遂に覺むるの期無くんば、往年文壇の牛耳を取りたる足下は、果敢なくも社會より忘れられて、又一人の願みる者無きに至らん也。

露伴君足下、僕をして直言するところ有らしめよ、足下は在來其の文壇に盡したるの事績を以て、既に已に足下が全きを致せるものとす乎、其の門下より秀才の出づる無きは、是れ足下が罪にあらずして、寧ろ渠れ等諸弟の懶惰にして、其の才を磨かざるに因ると雖も、而も是れ決して誇る可きの事にあらず、寧ろ少く其足下として、は大に耻づ可きの事なる也、耻づ可し、耻ぢて而して、後足下は須らく其の門下より何等才人の出づる無かりし責を埋めんが爲めに、自から大に勉めて、文壇の爲めに盡くすべき也、是れ足下當然の責任ならざる乎。

露伴君足下、其の門下より風葉、鏡花を出し、春葉、秋聲を養ひたる尾崎紅葉は、一方人材の養成に大に力を致したるにも、關はらず、尙ほ更に餘力「金色夜叉」の續々篇をもつし、東西短慮の乃を著はし、孜々として未だ

ひとみろを知らず斯くの如きは一見二兎を逐ふに近しと雖も是れ文壇の大家として人も許し自らも許すの士が當然の責任まことに然らざる可からざるものある也。

而も足下は今如何の態ぞ今春「文藝俱樂部」の巻頭に出したる「箱根草」の如き取材平凡筆力過滯而して其篇を尻切れ蜻蛉に終らしめて以て僅かにその責任を免がれんとしたるものにあらずや、その門下より何等秀才を出すなかりし足下は責を埋めんが爲めに僅かに斯くの如きを作り而して得々として我れは大に文壇の爲めに盡せりとなし以て衆人環視の中に誇らんと欲する乎。

僕別に足下の門下生諸君に書を興へて其の懶惰を責めんと欲すと雖も今先づ茲に足下に向つて更に大にその懶惰を責めざる可からず足下何すれを速やかに其の懶惰より覺めて再び「五重塔」當時の靈筆を揮

ひ以て文壇の爲めに盡すところあらざる足下の如きは正に須らく牛込先生と辯を並べて馳す可き也妄言多罪。

露伴門下の諸子に與ふ

幸田露伴君門下生松魚夕颯新泉鶴伴諸君足下僕寡聞にして未だ足下等が近狀を詳にせず將た久しく足下等が新作を讀まず只だ僅かに松魚君が博文館編輯局に在りて文藝俱樂部編輯の任に當りつゝあるを知るのみ思ふに足下等近來何を爲しつゝある乎これを聞かんことを願ふ豈に一人の僕のみならんや。

足下等由來筆執ることの稀なる何ぞその師露伴君の健筆なるに似ざる更に筆執るところの稀ならざるにあらざるものすどころの陳腐平凡未だ曾つて一の見る可きものを公けにせざるのその師露伴

君が「五重塔」を作り、「新浦島」をものし、「さゝ舟」を著したる密雲疾走の筆致に似ざるの甚しきや、松魚君に就ては他に言へることあり、又これに贅せず、鶴伴君が時折々小説に、讀賣新聞に出したる短篇小説に就いて是れを見るに、筆力澁滞、取材平凡、これを少年雜誌某々等の紙上に見る短篇小説に比するに、尙ほ且つ劣るところ有るも、優るところあるが如し、本年初刊の新小説に表はれたる「かへり咲」の如き、最も能く是れを表はしたるものと云ふて可也、夕鷺君に至りては、僕等の作の多くを見ず、たゞ僅かに數年前に新小説に於て一篇の情死小説(題名は忘れたり)を見たるやう覺ゆれど、是れまた柳浪等が既に描くところ有りし狭斜界の一些事のみ、若し夫れ新泉君の如きに至りては、僅かに新小説紙上に一二の雜録を見受けたるのみにして、敢へて僕の評すべきところには有らざる也。

露伴門下生諸君、足下等、少しくその師の誰れなるかを思ふて可也、曾つては文界の泰斗尾崎紅葉と對峙して、流るゝ如きの筆、走るが如きの想共に文壇を睥睨し、讀書界を横行し、其の勢力今に至るまでも衰へずして、依然明治文壇の花形役者を以て目せらるゝ、幸田露伴君は實に足下等が日夕親炙して、怙恃とも頼みたる恩師にわらずや、露伴が足下等の品性を陶冶し、筆力を鍛練せしめんとしたる苦心は、是れ足下等が到底夢想だに及び得ざるところ也、露伴が足下等を目するに他人を以てせずして子弟を以てし、極力是れが訓誨の任に當りたることは、是れ恐らくは又僕等が想像する限りにあらずらむ、まことに是れ一代の師表、其恩の高き計り知る可からざるものあり、而も足下等は果して何を以てこの高恩に報ひんとは欲したる、將た何を以てこの高恩に報ひんとは、思ふて茲に至れば、足下等と何の因縁なき僕に於てすら、猶ほ且つ心

身の寒きを覺えざるを得ざる也。諸君、足下等少しく眼を開いて、足下等の師露伴君と共に文壇の大家を以て目せらるゝ尾崎紅葉の門下を見ずや、そこには小栗風葉ありて艶麗の筆、大に江湖の喝采を博し、泉鏡花ありて幽玄の想、偏へに人情の機微を探り、徳田秋聲ありて輕妙の筆、巧みに人間の運命を寫し、柳川春葉ありて莊重の美、漸く世人の認むるところとならんとす、其他年少にして物故したる雪後、涼葉等、いづれも江湖の痛惜するところなり、霞山、荷葉、春鴻等は未だ多く知られずと雖も、一として將來大に展ぶ可き才ならざるは無し、是れを寥寥何等の振ふところなき足下等の門に比するに、秀才の續出、抑も其の軒輕いくばくありとする乎、足下等或は曰はん、是れ我れ等の罪にあらざして師の罪也、紅葉は其の門下を教ふるに巧みにして、我等の師はこれに拙なりと、嗚呼何ぞうれ自ら思はざるの甚

しきや、爾氏が文壇に於ける勢力や、はゞ徑庭なく子弟を思ふの念に於ても亦相匹似し、其間に何等偏頗巧拙の差異あるを見ず、而も其の門に出づるの諸家、彼れは秀才雲の如く、是れは寥寥晨星の如きものは、即ち足下等自ら勉めざるの罪也、然り、斷じて足下等が罪なる也。露伴門下生諸君、足下、願くは足下等猛省するところ有れ、思ふに、足下等は最もよく其の師の才を視ひ、其の師の筆を観るの便宜を有す、渠れ紅葉門下生等はよく是れを爲して功を收めたるもの也、足下等のこれを爲さざるは、即ち眞に爲さざるものにして、能はざるにあらざる也、詳しく言へば、勉めざる也、勉めて而して怠らざれば、足下等か足下の師露伴を越えて功を成すこと、必ずや紅葉の門弟等が殆んど紅葉を越えて功を成したると同一ならむ、所謂青は藍より出で、藍より青きものにあらざるか、是れ師に於て、筆を甚だ喜ばしとなすところなるべし、足下等

願はくば奮起せよ、願はくば瞑想して、曾つて文壇に對峙したる紅葉の門下より續々秀才の現出するありて、自己の門下よりは未だ一人の才人を出だす無き、其師露伴が心裏を思ひ見よ、足下等必ずや驕然悟る所あるべきを信するなり。

山田美妙に與ふ

山田美妙君足下、足下曩に言文一致體の小説を主張し、自ら斯體の文例を示して世に公けにするや、天下翕然として是れに趣き、口するもの必ず言文一致を説き、筆するもの必ず言文一致をものし、殊に斯體の文章最も廣く小説作家間に喜ばれて、叙情の筆を行るもの、叙景の筆を用ふるもの、一人として言文一致を應用せざるもの無く、遂に今日の隆盛を見るに至れり、足下の功、まだ偉なりと云ふべき也。

美妙君足下、然りと雖も今日の社會は極めて冷酷なる社會也、曾つて足下が言文一致體の文章を主張するの際、其の日本の文壇に於て最も進歩せる文體なることを論じ、而も其今後に於ける發達は美妙君足下の功勞によりて見る可きものあらむと説き、口を極めて足下を賞揚し、足下を煽動したるの社會は早くも咽元過ぐれば熱さを忘れて、偶々世に現はれたる足下の、一非行に托し、忽ち掌を覆へす如く、足下を罵詈し、足下を嘲弄し、罵詈嘲弄をなし、果てたる末、遂に足下を忘れて、また是れを口にせず、さながら足下は茲に冷酷なるわが文壇より死刑の宣告を與へられて、斷頭臺上一顆の露と消え果てたるなり、是れ冷酷にあらずして何ぞ、残忍にあらずして何ぞ、抑もまた渠等は暴虐なる忘恩奴にあらずして何ぞや。

美妙君足下、僕はれを山間の小童に見る、渠れの幼時始めて學校に上る

や、教師の是れを遇するさながら親子の關係のごとく、意を用ふること周到、愛を加ふること殷懃、また其の間に於て一點の邪心を挟まず、只管正しきに導かんことを勉めて、孜孜倦まざることを五年十年一日の如きものあり、而かも渠れが稍や長じて學校を離るゝや、先づ書物を忘れ、筆墨を忘れ、講堂を忘れ、遂にはその最大の恩人たる教師をも忘れて、道に是れと逢ふも一言の會釋だにせず、顔を背けて過ぎ、偶々恩師に針小の過ちあれば、忽ち是れを棒大に言ひ觸らして、遂に是れをしてその地に留まる能はざるに至らしむ、美妙君足下斯くの如き忘恩の所置の如何に足下を速かに忘れ去れる今の社會と文壇とに似たらずや、足下の如きも實に然り始めて、言文一致の新聲を聞きたる社會と文壇とは、足下を以て親となし、教師となして、只管是れに尊敬と愛慕の念を捧げたるも、其の稍や長じて、旬旬し得るに至るや、漸く足下に對して憎まれ口を

利き始め、全く獨歩し得るに及んで、又足下を要せずとなして、遂に是れを文壇以外、社會以外に放逐したり、其の爲すところの行ひの如何に憎くしさの限りならずや、夫れ放逐せらるゝは、寧ろ放逐せらるゝ者の意氣地無きに因すと言ふものあれども、僕をして是れを言はしむれば、意氣地なき丈け、うれ丈け、同情に値す可きものあるを見る也。

聞くならく、足下が昨冬、言文一致文例ある小著を稿するや、百方是れを書肆に諮りたるも、書肆みな足下が名を忌みて、一人の是れに應ずる者無し、僅かに内外出版協會の山縣氏、足下が窮を憫み、足下が斯文に對する苦忠を多とし、漸くにして是れを極めて低廉なる原稿料を以て購求したりと、嗚呼、從來足下に依りて利するどころ少からざりし春陽堂、博文館の徒、何ぞ夫れ無情にして現金なるや、如何に金錢の外、眼中また一物もあらざる商賈なりとは言へ、この忘恩冷酷の所置は、斷じて許す可

きにあらざる也。
 然れども足下紛々たる世評の如きは多く齒牙に掛くるに足らず、事實に於て足下が今日の文壇に致したる功勞は決して尠少と言ふ可からざる也、言文一致今日の隆盛は殆んど悉く足下が功と言つて可也、夫れ人間は神にあらざる焉、罪なく過ちなき全き人たるを得んや、かの謬々として道を説いて、足下が悖徳を責め、沒道義を詰りたるの輩、た是れ徳に悖り、沒道義の行ひを敢へてしあるの徒のみ、其罪を足下の露骨なるに比して、更に陰險に更に瘴惡也、うの假面を被つて容易に剝がれざるは、足下のあまりに正直なりしに比して、更に惡賢しこきが故也、焉んぞ渠れ等天を仰いで美しくしい顔を見せびらかすがごとく、而く正直にして罪なく過ち無きの人ならんや、嗚呼、足下、渠れ等に責められ詰じられ、イヂめられたるの足下は、實に不幸の人也、不幸の人ありと言へど

も決して耻づ可きの人にあらず、足下願くば前非を懺悔して、更に將來を慎み、百の嘲罵を背に聞き流して、再び大に苦闘の人となれ、斯くの如き小迫害に恐れて再び起たざらんことを願ふが如きは、斷じて男子の事にあらず、又斷じて足下の事にあらず、何爲れぞ自から小さくなりて世を狭むるの必要あらんや、悔ひたる足下は、既に俯仰天地に耻づる無き之士也、敢へて一文を與へて、足下を勵まし、足下を慰む。

江見水蔭に與ふ

江見水蔭君足下、巖谷漣山人の後任として、少年世界に身を委ね、雄健の筆、魁偉の想、以て大に少年讀者の間に喝采を博しつゝありと、足下の如き之士が、斯種少年雜誌に記者たるは、大に喜ぶ可きの事ある也。
 僕思ふ、漣山人の文や無邪氣にして流暢に、また今の文士に一特色を具

へて、優に他の諸文士の企及す可からざるの伎倆を有すと雖も、其の材
 おほむね單調、温和に過ぎてむしろ軟弱に陥り、其の是れを讀むもの、多
 くは箱入育ちのお坊つちやまに多くして、奇を好み、雄を競ふの少年に
 は、未だ甚だ喜はれざるに似たり、而して足下の文は如何思ふに足下の
 文や、文學的の眼光を以て是れを仔細に觀察すれば、氣徒らに豪放に尖
 して、修辭の瑕疵、取材の不自然、是れら殆んど枚舉に遑わらざるが如し
 と雖も、而も其の材多くは是れを波濤怒る海のはどりより捕へ來りて、
 文におのづから生々勇躍の氣を有す、文學としては如何はしけれど、海
 國少年の讀み物としては、足下の文また當然有らざる可からざるの價
 値を保てり、足下は文壇一流の餓鬼大將也、徒らに軟弱の文壇に手を出
 すことを止めて、むしろ斯種餓鬼共の乾分を養成することに勉めよ、是
 れを新春、足下がものしたる「海底の美」に就いて見るに、餓鬼大將の觀察

と筆鋒とを曲げて、強ひて文學ものとなさんと力めたるが如し、其の拙
 劣、不自然にして見るに堪えざる、むしろ當然の理なる可き也、果然、足下
 は文士にあらすして、餓鬼大將にてありき。
 水陸君足下、夫れ天下快事多しと雖も、有爲の少年を薰育すること程の
 快事、いづこにか有らんや、足下たるもの、益々力めて一意少年薰育の任
 に當り、愈々勵みて以てわが海國少年の膽つ玉を鍛へ上げよ、足下はま
 さに他に野心なく、希望なくして可ならん也、完全なる少年雜誌記者を
 有するの國は、幸なる國也、榮々可き國也、以て大に誇る可きの國ならず
 や、我國由來四方海に接して、最も海國の雄を寫すに便宜を有せるに關
 ばらず、未だ一人の筆を染めて是れを勉めんと欲する者なし、海事に關
 する思想の注入は、まさに第二の國民を養成する者の最も意を用ふ可
 きところ、足下、力めよ。

上田敏に與ふ

上田敏君足下、足下夙に大學を出でて、深く思を泰西の藝術に潜め、傍ら創作の筆を執りて、孜々倦まざるに幾年、この頃才名やうやく文壇に響きて、人皆な足下が眞摯の氣を慕ふて止まず、思ふに學を赤門に修めたるもの、多くは輕佻浮薄にして、眞に文藝の友となす可きの士無く、たゞ是れ利を趁ひ、名を慕ひ、而して恬として耻づる無きの徒、比々として皆然らざるは無し、この間に於て、足下が着實に研鑽修養を怠らざりし者、實に多し、するに餘り有る也。

敏君足下、足下は今日の文壇を以て如何と観たるは、た文壇の將來をトして如何の態を爲す可しと観たる、夫れ往年二三淺薄なる學者輩、何れも泰西文藝の皮相を傳へてこのかた、人心惑ひ、泰西文藝の學ん

で以て取る可きを悟り、一にも泰西二にも泰西と狂ひ廻りたる揚句の果はやがてわが文壇に未熟なる革新の氣運を生じて、かなたに客觀の美を喋々するあれば、こなたに又主觀の美を喋々するあり、或は形而上の美、或は裸體畫の美、喧々囂々、徒らに皮相の見解を闘はして、以てひうかに識者の嘲笑を招きつゝありき、斯くの如きもの、今日に至りて、未だ全く革たまず、寧ろ益々皮相淺薄に流れ行くかの觀あり、斯種の弊風にして止むどころ無く、んば、今より數年の後に於て、日本の文壇は、まさるに全然泰西文壇の皮相のみを假り來れる無主義無見解の文壇と化し、終るや、必せり、思ふ可き現象なりと云ふ可き也。

斯くの如き輕佻なる文壇に於て、識者の最も翹望して止まずとなす、とあるものは、實に學識深遂にして、思慮綿密、毫も浮華虚飾の意無く、して忠實に眞摯に文壇を患へて止まざるの士たらざる可からず、然し、是

實に少數の識者の要求のみに止まらずして、寧ろ今日一般讀書界の
 要求なるが如し、わが讀書界の多くは、既に已にかれら煩瑣にして淺薄
 なる理論を聞き飽きたれば也、又是れを聞くを欲せざれば也、
 敏君足下、足下の如きは實に以上の要求を充たす可く、文壇に立ちたる
 の士乎、其の論ずるところ、とりわきて人目を驚かすふしもあらざれば、
 而も至るところに、足下が斯文に對する忠實の氣の溢れざるは無く、我
 々研鑽の跡を止めざるは無し、其の筆を揮うて英米の最近文學を論じ、
 詩聖ダンテを評傳するや、率直なる論旨、深遂なる觀察、一々讀者をして
 首肯せしむるに足るものあり、斯くの如きは實にわが讀書界の望んで
 止まざりしところの文字、その是れを採つて思想の涵養に資する事の
 大なるや、誠に圖り知る可からざるものあらん、足下願はくば益々修養
 を力め、研鑽を怠らず、かの國文藝の神髓を採り來つて、以て煩瑣なる今

日の文壇を一掃し、以て惑亂せる今日の讀書界を慰撫せんことを勉め
 よ、若し夫れ足下が美文に至つては清婉優麗、また今日の文壇その比を
 見ず、みをつくし、二篇これを擲たば誠に金玉の響きを發せん也。
 加ふるに昨者新たに聞く、足下日ならず「藝苑」なる文藝雜誌を發刊する
 の計畫ありと、是れある哉、わが國未だ一の完全なる文藝雜誌を有せず、
 多くは生嚼りなる西洋文學の趣味を拉し來りて、自ら得たりとなし、是
 れ清新也、是れ南歐文學の化身也、と路傍に誇れるの三文雜誌のみ、足下
 この間に立つて、冀くば完全確固の一文藝雜誌を發刊し、以て一は雜誌
 界の革新を圖り、一は日本文學の振興を計らんことを、敢へて一文を寄
 せて足下に望むこと然り。

後藤宙外に與ふ

後藤宙外君足下、足下筆を「新小説」に執りて、着實の想、穩健の筆、毎號の時
文欄内に萬丈の光焰を吐き、尙ほ傍ら小説をものし、雜録を書きて我々
倦むところを知らざるがごとし、本年初刊の「新小説」紙上に現はれたる
足下の「この光」の一篇は、實に足下が「新小説」編輯の餘力を以てものせ
られしものなりとか、足下また大に勉むるの士と言ふ可き也。

「この光」はもと短篇なるにも似す、是光明小説也、家庭小説也となし世
評頗る嘖々として、倭に新春の小説界を歴したりき、然りといへども僕
をして是れを評せしむれば、この光は光明小説として、はあまりに平
弱也、田園の間に人となりたる粗朴の人間を描き出して、は、盡せるの
所も有り、されど、全編を通讀するに、眞摯の氣と熱烈の情とは二ながら

認め難きに、苦むもとより這間の愛情や、かの男女相愛の情と異りて、極
めて清く、極めて美しく、愛情なりと雖も、うのかかるか故に、眞摯の氣
と熱烈の情の必要なき理あらんや、僕思ふに愛情なる者や、其の對象の
何なるやを問はず、必ず昂く、必ず熱せざる可からず、其の然らざるもの
は、是れ偽りの愛也、未だ愛情ならざるの感情也、足下の「この光」の如き、
筆致なだらかにして流るゝが如く、取材温かにして掬す可しと雖も、惜
しいかな、熱烈の情と眞摯の氣を失ひ、描寫の筆、輕きに過ぎて、讀者をし
て何等の感興をも起さしむるに足らざるに似たり、僕これを以て「この
光」は小説として、はあまりに平弱なりとなす。

宙外君足下、足下の時文評論に就いては、姑くこれを言はず、足下の創作
の手腕に就いて論せんに、足下が「この光」の如き題目を捉へ來るは、む
しろ其の任にあらざる無き乎、思ふに光明小説を要求するは今日讀書

界一般の傾向なるが如きもの、是れをものするの士に於て、其任たる
 と、其の任たらざるとの別なき能はず、足下の如きは、むしろ光明小説の
 題目を捉へ來る可く、あまりに其の頭腦悲觀的に過ぎざる無き乎、曾つ
 ては「ありのすさび」「思ひざめ」等を公けにして、大に洛陽の紙價を貴か
 らしめし、足下が今日「不如歸」「無花果」等を要求する讀書界の傾向に投
 じて、俄かに斯種の題目を捉へ來るが如きは、むしろ是れ足下としては、
 あまりに輕佻に過ぎざる無き乎、宜べなり」のこる光」の一篇が觀察皮相
 に止まり、筆力わざとらしき所多く、遂に足下の作としては全然失敗に
 終りたるもの、僕ます、足下が斯種の題目を捉へ來るの士に、あらざ
 ることを信せずんば、あらざる也。

足下の著「ありのすさび」及び「思ひざめ」の二篇は、僕の最も愛讀したる
 とあるもの也、殊に後者「思ひざめ」は、幾く度か僕の爲に繰り返された

り、これが爲め、篇中の人物は、今なほ僕の小さい頭腦に、鮮明なる印象
 を止めて、僕が静思の時、默考の際、未だ曾つて其の記憶を喚起せざるは
 ならず、かの鳳次郎や、お濱や、或はまた憐れなるお糸や、非道なる三星屋
 主人や、是れ等篇中に現はれたる人物のおもかげ、深く腦裡に存して、爾
 來四年五年の長日月を過して、今なほ去ることなし、是れ何が故ぞ、他な
 し、足下が靈妙の構想、深刻の筆致、巧みに僕の胸を抉りたるもの有るが
 故也、かの鳳次郎が散歩の歸途、道にお濱と邂逅して、その悲惨なる長物
 語りを聞くのあたり、或はお糸がその身を殺して、あはれにも鳳次郎お
 濱の幸運を祈るあたり、はた正月二日本門寺に情死の約調ひて、お濱が
 男に手縫の着物を着せ更へさせ、春着にと思つて拵へて置いたのが、飛
 んだ冥土へ年始に行く春着にあつちまつた」と正體も無く泣きくづを
 る、あたり、何等悲涼の情致ぞや、僕は遂に一篇の「思ひざめ」を忘るゝ能

はさる也。

宙外君足下、斯くの如きは豈獨り一人の僕のみならんや、恐らくは僕と同一の熱心を以て足下が舊著を反讀しつゝあるもの妙きにあらざる可し、さるを何ぞや、足下其後身を一雜誌の編輯局に隠して、また思ひざめ「の如き佳作を公けにせず、偶々小説をもつと雖も、今回の「のこる光」の如き出来損なひの、人真似の作を出して、僅かにその責を逃がらぬのみ、且つや足下近來の評論、おほむね陳套平凡にして、また耳を傾けて聴くべきもの少し、是れ又恐らくは足下が任まらざる可し、足下何ぞ速やかに一雑誌の編輯を辭して、再び往日の小説家宙外に返り、大に悲涼なる筆を揮ひて、深刻なる抒情の大文字をもつせざるか、の小雑誌の編輯や、人真似の光明小説や、或はまた有りふれたる時文評論や、是れらは遂に足下が任にあらざる也、人は各々自己の長ずるところを知らざ

る可からず、足下が長所は彼れらにあらずして、むしろ是れにある可き也、全力を傾注して、深刻なる抒情の筆を離たざらんか、足下が數年の後に造詣するところ、蓋し尠少にあらざる可し、夫れ男子文壇に立ちて、大論策なく、むば、大創作あらざる可からず、足下既に大論策なし、焉んぞ自己の長ずるところを發揮して、大創作を試みざる、僕が足下を罵り、足下を戒むるもの、是れ大に足下に望みを屬するもの有るが故也、乞ふ焉を諒せよ。

徳富蘆花に與ふ

徳富蘆花君足下、足下の所著「不如歸」及「思出の記」は共に高く我が讀書界を聳動して、幾万の讀者、悉くその靈筆に感じ、その觀察を喜び、争うて是れを購へり、而して足下が今國民新聞紙上に掲載しつゝある「黒潮」の

一篇更に大に讀者を喜ばしめ、都鄙の士女をして「明日」を樂しみに待たしむと傳ふ、足下が我が讀書界に有する勢力もまた大なりと言ふ可き也。

思ふに足下の筆が斯くの如き勢力を成すに至りたる所以のものは、既に斯界の定評あるが如く、在來の舊套を排し去りて、専ら清新なる思想を、優麗なる筆墨に表はしたるに因せずんばならず、讀書家はおほむね舊來の千篇一律なる戀愛小説に倦めり、社會の暗黒の方面のみを描寫してまた他を知らざる花柳文學に嫌氣を催はせり、この際に於て、足下が、大に他の諸作家と觀察の方面を異にして、清新の筆、以て光明を説き、人生を論じ、信仰を教へ、聖愛をわけつらふ、足下の所作が家庭に喜ばれ、學校に喜ばれ、廣く一般の社會に歡迎せらるゝもの、また所以無きには有らざる也。

僕も亦曾つて足下が「不如歸」を讀みて、愛慕措く能はず、幾度か是れを繰り返し且つ毎夜家族にも讀み聞かせしに、何れも其の取材の高くして筆力の健なるに服し、僕が母の如きは、篇中の女主人公浪子の悲惨なる運命に悲み、武雄のままならぬ境遇を憐れみ、殊にその亡き人のおくつきに詣で、千斛の涙を瀧ぐのくだりに至つては、殆んど泣涕し、僕も亦、眼濕ほひ聲曇りて、終に卷を掩ふて暫時の休憩を取りぬ、思ふに斯くの如きもの獨り僕と僕の母のみに非ざるべし、足下が讀書界に與へたる影響、洵に多大なりと言はざる可からざる也。

蘆花君足下、然りと雖も、隴を得て蜀を望むはまた人情の止むを得ざるものか、足下が筆實に今の讀書界の要求に應じて、はゞ遺憾なく運ばれたりと雖も、一二の瑕疵を擧ぐれば、其の描寫の局面あまりに狭小にして、而も亦個々人物の描寫精緻に過ぎ、遂に讀者をして倦厭の情を起さ

しむる無きか、かの「思出の記」の如き、實に我國の創作としては老然たる大冊なりと雖も、しかも讀了の後、腦中に殘さるゝは只だ主人公菊池慎太郎君の性格が非常に明瞭に描寫されたりとのこのみにして、他に何等殘るところ有らざる也、是れその局面を故らに狭小となして、人物描寫の精力をたゞ一篇中のある人にのみ傾注したるがため、其勞力の割合に他を感動せしむること少かりしにはあらざるか、描寫の精と簡とはもとより其要を得て、精なる可きは精簡なる可きは簡ならず、可からずと雖も、此篇の如きはむしろ精なるはあまり、精に過ぎ、簡なるはあまり簡に過ぎて、結局其の要を得ざりしものにはあらざるか。

然りと雖ども、足下斯くの如きは單に白壁の微瑕も、とより事々しく論ず可きものにあらず、此篇の如き實に菊池慎太郎の半生を遺憾なく描き盡して、苦學す可く、力行す可く、戀愛す可く、成業す可き人生の逕路を

巧みに教へたるもの、むしろ青年行路の指針として見る可きものか、我國青年讀書家は、大に足下に對して感謝を拂はざる可からざる也。

蘆花君足下、僕が足下に對して大に謝せざる可からざるところ、望まざる可からざるところ、大略以上の如し、聞く足下が今國民紙上に掲げつゝある「黒潮」は一年有余に亘るの大作なりと、好漢願くば我が文壇の爲に餐を加へて、益々文字を研ぎ、感想を新たに、以てわが國の文壇に燦然たる光彩を放たんことを、至囑、至囑。

内田魯庵に與ふ

内田魯庵君足下、足下去年の正月文藝俱樂部に「破垣」の一篇をものして、大に今の華族なるものゝ醜行を發くや、是れ風俗を壞亂するものなりとして、檢事の告發するところとなり、斯篇登載の雜誌は即日發賣頒布

を禁止せられて、足下また是れが爲に罪に問はれ、一時時論囂々として
 鳴りを静めざりしが、其際足下二六新報紙上に時の當局の不明を責め
 て、胸中限りなきの不平を遣りし此かた、山に入りしか、海に隠れしか、杳
 として従來の健筆家足下が消息を耳にせず、僕のそいろに怪訝に堪え
 ずとなす所也。
 思ふ、足下の小説は時に或は醜猥讀むに堪えざる個所ありと雖も、而も
 もどこれ墮落せる現代の社會に激するところ有りての文字、仔細に觀
 來らば、又必ずや這箇醜猥なる辭句の中に炎々燃ゆるが如き不平の氣
 の存する無くむばある可からず、かの「破垣」を始めとして、在來世に現は
 れたる足下の著、おほむね皆斯種慷慨の韻を止めざるは無し、是れ何等
 理想なく、不平なき今日の文壇に於て、むしろ珍とあすところ、其の是れ
 を責めて、風紀を亂すものとなすが如きは、不明の甚しき也。

魯庵君足下、足下は抑も何が故に斯くの如き一小頓挫に辟易して、自ら
 其の筆を折らんとは欲したる乎、足下の著、其の局所に於ては或は唾し
 て棄つ可きの文字ありと雖も、而も其の唾して棄つ可きの文字を取り
 除かば、おほむね是れ激越悲涼の著、軟風しきりに吹き荒ふ今日の文壇
 に於ては、まことに稀に見るところのもの也、僕未だ足下を知らずと雖
 ども、足下の見識と膽量とは紛々たる今日の諸作家中にありて、優に一
 頭地を抜くに足るが如し、足下何ぞ速やかに立つて、社會の迫害を排し、
 當局の干渉に抗して、更に大に捲土重來の勢を示さざる、斯くの如き小
 迫害になやみて、筆を折り又立たざらんことを冀ふが如き、豈是れを見
 識あり、膽量ある文士の事と言ふを得可けんや、足下また大に奮ふと
 ころ有りて可なる也。

菊池幽芳と與ふ

菊池幽芳君足下、足下が關西文壇の爲めに盡したるの功勞や實に尠からざるものあり、是れを單に僕の知れる事實に就いて數ふるも、尙ほ幾度か五指を更へざる可からず、思ふに「己が罪」を著はして、從來何の誇るところ有らざりし關西の文壇に、始めて新たなる思想の花を飾りしものは、足下也。大坂毎日新聞社をして懸賞小説募集の舉を爲さしめ、以て秀才中村春雨、米光、關月等を江湖に紹介せしも、足下也。關西の讀書界に風葉、鏡花、天外等の作物を紹介せしものも亦實に足下なる也。是れも足下、彼れも足下、思ふに大坂地方の文壇が今日の隆盛を致すに至りし所以のもの、おほむね足下の力に因ると言ふも不可なるなからんか。且つや足下自身は是れ九年以前の毎日新聞校正掛たり、其の文藝の道

に思を寄するや、孜孜として倦まず、屹々として怠らず、常に我國の古書を涉獵し、泰西の文學を研鑽すること、十年殆んど一日の如きものあり、其の才名の漸く關西の文壇に騒ぐや、人は何れもみな其の精勵に驚き、刻苦に感じ、我國の文人にまた斯種篤學の士の有るを、寧ろ意外となし、たるが如し、而も今は足下、實に關西操觚者中の泰斗として、今人の尊重し、江湖の畏敬するところとなる、足下の如きは今日の文壇に在りて、まことに稀に見るところの士也。

幽芳君足下、足下既に斯くの如く功を致すところ有り、而も足下の任は未だ是れを以て終れりとなすべきにあらず、僕思ふに關西文壇の開拓の如きは實に至難の事業、常人の爲して以て到底功を奏し得ると云ふに、あらず、抑も霞亭、桃水等朝日社の俗文士が最も尊重せられ、是れらの作物が最も愛讀せられたる關西の文壇を、一朝一夕にして開拓し、刷新

せんとするが如きは、寧ろ是れ實に無理なる注文と云はざる可からず。關西の文壇が足下に依つて幾分の開拓を遂げられたるは事實也。然りと雖もこれ實に幾分の刷新のみ、未だ其の全きを致せるにあらずして、寧ろ同地の讀書界、今尙ほ藤亭、桃水等の作物が最も尊重せられ、愛讀せられつゝあるを見る、是れ而も當然の事のみ、讀書界の動搖は未ださ程までに甚しきものにあらざれば也。

而して僕はこれと共に、足下の任が益々重かるを信せんと欲す、何となれば、關西文壇今日の隆盛を見るに至りしは實に足下の功なると共に、益々是れが發達刷新を圖るは又實に當然、足下の任なる可きを信ずれば也。抑も亦斯くの如きの小成功に心高ぶりて、俄かに怠慢、尊大の風を學ぶが如きは、眞箇文藝の道に忠實なる者の態度なりと言ふを得んや。足下のなす所斯の如きことなかる可きを信すと雖も、而も昨夏毎日紙

上に掲載したるかの、白衣婦人を、未だ其の半ばにだに達せしめずして中止したるが如きは、た伊原青々園の「爲朝重太郎」の稿を、同じく尻切れ蜻蜒に終らしめたるが如き、是れ斷じて文藝に忠實なる者のなすべき事にあらず、はた關西文學の振興を圖る上より見ても、是れ決して策の得たるものなりと言ふ可からざる也。一、二斯くの如きの事を以て、足下を責むるは、聊か冷酷なるが如しと雖も、而も事實として現はれたる足下が、怠慢不忠實の態度に就ては、事の些末なるの故を以て、僕遂に是れを黙過すること能はざる也。

幽芳君足下、足下が關西文壇に致したる功績は實に大也、而して其の九年以前の校正記者たりし足下に依つて致されたるが故に更に大なる也、其の功績の斯くの如く大なる足下が、一朝才名の江湖に播するに及んで、忽ち九年間苦學の行を忘れて、滔々たる今の文學者流と同じく小

成功に安せんとするが如きの瀛あるは、僕の轉た痛惜して措かざる所也。足下は未だ必しも斯くの如くならざるべきを信ず。雖も而も是れ實に人情の弱點、今にして戒むる所無くんば、後日又悔みて返らざる失敗を來す無きを保す可からず。足下たるもの冀くば、當年の心を以て心とし、從來の力行を旨とし、而して更に大に筆硯を磨して、關西文藝の將來を圖るところを、僕の喃々として苦言を呈するものは、他なし。實に關西文壇の爲に憂ふる所あれば也。幽芳君足下、足下の責任は、足下の成功に伴つて愈々益々重を加へたる也。足下にして勉むるところ無くんば、漸く革新に向はんとせる關西の文壇は、乍ち其機運を失はん。足下たるもの大に奮はざる可からず。

與謝野鐵幹に與ふ

與謝野鐵幹君足下、擬日市井營利の徒、文壇「照魔鏡」の一書を公にして、足下を誹譏し、足下を譏謗し、足下を呼んで強盜とあし、殺人者となし、喰逃に巧みなる者なりとし、放火の技に妙を得たるものとなし、あらゆる足下の惡徳を擧げて罵詈謗發至らざるもの無かりき。僕當時に於て既に足下が斯種の人物にあらざることを信じたり、しかも爾後に於ける足下が擧措を、一々仔細に觀察するに、よしや「照魔鏡」傳ふるところの凡べてが、足下私行の真相ならずとするも、尙ほ且つ充分の大胆と同情とを以てすら、足下を以て、従前僕が確く信じたる足下と觀る能はざるは、何が故ぞや。

鐵幹君足下、乞ひ願はくば、徒らに聲を大にして、社會の迫害を罵り、文壇の冷酷を咎むるなかれ。社會と文壇とは、各々社會と文壇との觀察あり、豈に夫れみだりに、罪なき過ち無き君子人を目して、渠れは墮落せ

る賣文奴なり、渠れは廉耻を知らざる悖德漢也、渠れは強盜也、渠れは放火の犯人也、渠れは何也、渠れは何也と、徒らに人を誣ひ、人を罵りて快とするものならんや、而して足下これを以て、是れ我れを嫉むもの也、我れをソツムもの也となす、嗚呼何ぞ夫れ傲大自尊の甚しき哉。

足下先づ双手を其胸に當て、默思せよ、足下は抑も何者なりや、曾つては僧侶たり、教師たり、校正掛りたりし足下、今は一文藝雜誌「明星」の主幹としての足下、更に少年文藝雜誌「少詩人」の主幹としての足下、たゞ是れのみ、又他に、稠人環視の中に立つて、大に傲る可き、閱歴ありや、才能ありや、地位ありや、敢えて問ふ、足下は足下自身、以上の閱歴、才能、地位を以て、廣き社會と文壇とに嫉まれ、ソツまるゝものとなすや、足下幸にして安んぜよ、社會と文壇とは未だしかく偏狭にして、嫉妬心深きものに非ざる也。

しかも足下は以上の僕の言に對して、否、我れは日本の詩界に立つて、全然我が國詩を革新したり、舊調固陋の和歌を打破して、清新濃麗なる趣味をわが國詩界に普及せしめたりと答へんか、然り、足下は實にわが國詩の革新に與つて大に力あるもの也、此點に於ては恐らく誰れとて其功勞を認容せざるものはあらざる可し、しかも足下が以上の功勞と名譽とか、世の嫉妬と猜疑とを招きたる原因となすに於ては、僕小説の革新者坪内逍遙、尾崎紅葉、俳句の革新者正岡子規等諸君を呼ぶに「強盜」を以てせず、「放火の犯人」を以てせず、むしろ是れらの諸君に多大の感謝と尊敬とを拂ひて、獨り和歌の革新者たる足下に對してのみ、強盜呼ばり、放火犯呼ばりする社會と文壇とに疑なきを得ず、果然、足下は嫉まれ、ソツまれたるにあらざして、幾分の非行おのづから社會と文壇との爲に諷まれ、斥けられたる也、足下少しく足下を知りて可也。

與謝野鐵幹君足下、僕豈に足下を強盜と放火犯人とを以て誣ゆるもの
 ならんや、しかも足下が近日の態度、また詩人として許す可からざるも
 のあるに似たり、煩を恐れて一々これを擧げずと雖も、足下が是れを以
 て猶ほ且つ男兒赤裸々の面目なりと高言して、傲然路傍に誇るに於て
 は、其罪斷じて許す可からず、わらわらゆる嘲罵の裡に立つてまでも、尙
 は足下はその情慾を遂げんとする乎、わらわゆる冷酷、無情、残忍の行爲を
 敢えてしてまでも、尙ほ足下はるの燃ゆるが如き肉慾を遂げずんば止
 まざる乎、足下先づ是れを思うて、而して後に社會と文壇の迫害を憤る
 可く、恨む可き也。

鐵幹君足下、以上僕が述べたる所を再び繰り返して足下に問ふところ
 有らんか、曰く、足下は未だ足下自身を知らざるもの也、足下自身の地位
 を知らざると共に、足下自身の罪惡を知らざるもの也、是れを以て足下

は、世の公平なる批評を以てさへも、猶ほ未だ嫉妬也、猜疑也、迫害也、怒
 號して、敢て足下自身の非行、遂に斯かる世評を招くに至りたる所以を
 知らざる也、足下何すれぞ速やかにその非行を俊め、世の嘲罵と迫害と
 の重圍を解き、以て最も着實に最も眞面目に、國詩の革新を圖ることを
 勉めざるや。

夫れ自尊は大に可也、自惚は稍や不可也、若し夫れ獨りヨガリに至つて
 は、其陋むし、ろ車夫馬丁も爲すを快しとせざるどころ、足下幸にして車
 夫馬丁の仲間より脱することを得ば、是れ唯獨り僕及僕の同志の慶す
 るどころなるのみならず、又以て廣く我が文壇の爲に慶す可きの至り
 也。

與謝野鐵幹に與ふ(再び)

與謝野鐵幹君足下、僕曩に一書を足下に寄せて、直言憚るところ無く、足下の人格を攻撃し、品性を罵詈し、以て其の一日も早く詩人の面目に返へるところあらむことを望みたり、然りと雖も足下が述作にかゝれる長短の詩に就いては未だ一言の之に及びたるもの非ず、思ふに足下や、其の品性に於ては夫れ斯くの如き幾多の欠點を有すと雖も、而も其の作詩の技に於ける靈腕に就いては、誰人と雖もこれを否む可からざるもの有りて存せずんば、あらず、其の取材の高玄、其の措辭の清新、天地玄黃「東西南北」の如き舊著はしばらく問はず、是れを昨春發行の足下の「むらさき」一部に就いて見るも、優に誇るべきの靈腕を具へ、この間また國詩革新の氣運を認むる無くんば、あらざる也、其の品性に於て欠點

を有する足下も、單に詩人として評議する時は、まことに當代稀れなる作詩の技を有するの士なる也。

然り、足下は實に當代稀れなる作詩の技を有せり、この故に足下が詩や、時に或は奔放不羈、以て男子の意氣を鼓して止まざるものあれば、時に或は悽惋濃麗、醉ふが如き戀愛の境地を歌へるもあり、或は恨むが如きあり、或は笑ふが如きあり、格調取材共に、常規を以て計るべからざるものあり、是れを古歌に比するが如きは、抑も野暮の骨頂か、更にこれを新詩社中雙々足下と影をなす晶子の作に比するに、彼れに於ては或は措辭の流暢、足下に優るもの有らむも、而ももとこれ女性觀察の範圍は足下に比して狭少、其の作るどころの多くは「醉ふが如き」にあらずんば、恨むが如きのみ、遂にまた足下の「怒るが如き」「患ふが如き」の趣味を認め得可くも、あらざる也、躬治、信綱、月の桂のや、薰園諸氏の歌みな流暢にし

て清新の趣味掬す可きもの有りど雖も、何れも觀察の範圍狹少にして、千篇一律、遂に足下の後塵を拜するに過ぎず。足下は實に新詩人として、は今の文壇に無比の才なりといふべし。然れども僕思ふに、足下近來の作、徒らに其才を恃んで濫作に陥るゝらざるか。是れを本年二月發行の「明星」に掲げられたる「舞の袖」に就いて見るに、材はあまりに突飛に過ぎて、調はみだりに破格を旨とし、却つて津々の趣味を殺ぐものある無きか。「舞の袖」中の「わらはめが若水まゐる富士のふもと沼津に明けし年の朝日夜」「吉備は遠し梅にと言はず詩のゑにし浪華のふた夜君と相見る」等は高調にして趣味溢るゝが如きもの有りど雖も、而も「天王寺伶人町はかちなりし相行く友の梅にうつくしき」「春の宵を紋十郎は藝の神津太夫老ひて浪華の寒き」の如き、あらずもの材を強めて取り來りたるもの、其の耳障り多くして讀者をし

て感せしむるところあらざるはむしろ當然の事か、よしや濫作にあらずとするも、足下が作近來たしかに悪しき方に變じたるが如し、かつて「この夜われ五千里の北雲低き峰の雪にもいさどほろしき」と誦して沈痛の氣を吐き、森の秋に沈の木朽ちて香を見たりあゝたゞ人は闇にたをるゝ」となして大に社會の冷酷を罵りたるもの、這間の意氣、今はたいつこにか求め得む惣じて足下が作近時大に衰へたるに似たり。晶子の歌にかぶれてみだりに軟弱に陥りたるにあらずんば、窘窮の辭徒らに平凡の材を歌ふもの、是れ足下近時の歌也。僕足下の爲にこれを惜ま

ずんばあらず。鐵幹君足下、足下は眞に詩人の材を有す、その是れを否むものは、これ眞に足下を嫉むの徒のみ、然りと雖も、眞面目を失しては詩人の材を有するの士もまた或は失敗に終る無さを保せず、足下近時の作はおほむね

斯種眞面目の氣を失したるが如し、冀くば自ら願みて、益々足下の詩才を研磨し、濫作の弊を排し、最も眞摯の氣を以て詩文に對せよ、足下の如きは其の品性にはたろの詩に共に眞面目に反らざる可からざるの士、足下たるもの勉めずして可ならん。

與謝野晶子と與ふ

與謝野晶子女史足下、足下泉州堺に生れ、幼にして學事に志して、孜孜倦まず、就中國學に通じ、讀破幾千卷、造詣するところ頗る少からずと云ふ、先年與謝野鐵幹の新詩社を設立して雑誌「明星」を發刊するや、足下またはるかに歌文を寄す、思想の豊富、措辭の斬新、多くの寄書家を抜き、才名忽ちにして海内に轟き、歌文の技はむしろ鐵幹に優れるものありと稱せらる、超えて昨年、秋、足下遊學の名を以て東都に上り、澁谷の新詩社

に寓して、日夕鐵幹と親む、是より先き市井の奸兒等、文壇「照魔鏡」を公けにして、大に鐵幹の惡徳を指摘するや、渠の勇大に是れを憤りて、遂に茲にろの妻と破鏡の嘆あり、人、渠れが前妻の不幸を憐れまざるは無し、然るを足下、昨年の師走、人みな巷に急ぐの頃を以て、遂にヅウ／＼しくも鐵幹と合登の式を挙げ、是れより與謝野の姓を公けにして、恬然たり、足下等夫妻は是れを以て、宿年の戀を遂げたるものとなせり、嗚呼、足下、足下等が所謂戀なるものは、あらゆる冷酷なる所置を敢えてして、までも、遂げざる可からざるものなる乎、あらゆる嘲罵の聲裡に立ちても、遂げずんば止まざるものなる乎。

晶子女史、足下、足下の良人たる與謝野鐵幹は、嘗つて東洋流の男女の交際を論じて、是れ未だ未開國の交際也、文明國の男女は、須らく最も大胆に、最も赤裸々に交際せざる可からずと云へり、大胆可也、赤裸々大に可

也然りと雖も是れら「大胆」や「赤裸々」や常に足下等が慣用する抽象語の中に何等か「冷酷」や「破廉恥」の意味の含まれたる思ふに文明國の男女は足下等が言ふところの如く、大に大胆に大に赤裸々に交を結びつゝある可し、然れども渠れらは他の一方に對して冷酷なる所置を敢へてしてまでも尙ほ大胆に其の交情を續けつゝある乎、他の社會に對して極めて破廉恥の浮名を歌はれてまでも尙ほ赤裸々に其の交情を温めつゝある乎、斯くの如き行爲を非難するはひとり「未開國」たる我が東洋のみにあらずして、却つて禮節を重んじ、情義を尊ぶ文明國に於て更に大なるを見る、足下斯くても尙ほ足下等夫妻は是れ文明國の交際也、西洋流の夫婦也と大に叫ぶを得る乎、思へ、足下等新たに夫婦の交りを結ぶを聞く、渠れ鐵幹が前妻の悲嘆は幾許ぞや、惡縁の兒を抱いて、今日この頃や如何になしつゝある思ふて、ここに至れば更に面識なき僕に

於てすら憐憫の情自ら禁じ能はざるものあり、而も足下等些の意に介するものなきか。

晶子女史足下、夫れ人の妻を追ひ出して、己れその後釜に据はる、是れ裏店の七公熊公の喚に於て、猶ほ且つ寢覺めよろしからざるを覺ゆとかや、況んや書を讀み、詩を作り、婦徳の如何なるものなるかを學びたる足下、たとへ口に西洋流云々を喋々するも、なほ幾分の良心あらばその呵責を免かれざらんか、敢へて足下に問ふ、足下は雑誌の上に公然與謝野晶子の名を掲げ出して、寸毫の疚しきところ有るを覺えざる乎、再び足下に問ふ、足下は世の交際社會に出で、我れは與謝野鐵幹の妻晶子なりと名乗りて、恬として少しも耻づるところ有らざる乎、若し疚しくも覺え、耻かしくも感じなば、足下は赤は婦人として恕す可きの點あるべきも、之に反して更に耻づべきの事にあらずとなすに於ては、僕わが文

壇の爲、社會の爲、鼓を鳴らして大に是れを責めざる可からざる也。

興謝野晶子女史足下、足下が人品、行爲に就ては僕は言ふ可きところを盡くせるがごとし、最後に足下近來の述作にかゝる詩に就て言はむに、往年處女としての足下が作の奔放恰かも天馬の空を行くが如きおもかげは、今又これを求む可からざるに似たり、是れを本年初刊の「第二明星」に掲げられたる「紅梅笠」に就て見るに、かの曩の日に比して稍や長とたりとも覺ゆるは、徒らに詞句の豐麗、措辭の圓熟等の末技に過ぎずして、かの處女時代に於ける才氣横溢の絶品は求めて之を得べくもならず、曾つては「歌にきけな誰れ野の花に紅きいなむおもむきあるかな春罪もつ子」と叫びて胸に溢るゝ懊惱の餘炎を示し、「わかき子のこれよりしは鑿のにはほひ美妙の御相けふ身にしみぬ」と歌ひて大にけだかき理想を傲りたる鳳晶子女史の才氣は、遂に「紅梅笠」のいづれの歌に

も見る可からざる也、うれがしと名乗る人が曾つて足下に寄せて、

借問す、天上の牽牛と織女と相伴ひて下降ましませしものならむには、よし星のあふせのはかなくも、相思ふ可きはこゝに限らる可きに、一は異端の戀に雲鬢花顔にはつれ、他は夢は戀に、おもひは國に、身は塵に、二十年の長き寂しさを知らず、意氣づく、劍のまへ、韓京の虎穴に入り日頃親みける美しき韓の妓、翡翠が衣をかつぎて王城を逃れ出で、其のうつり香を今に忘れぬ情け知りの勇士なるは何ぞや(中略)凡そ物その平を得れば鳴らず、吾人は両吟哦の爲に、この兩詩人の前生は牽牛織女にあらざることを祈るや切なり

と、諭し得て至れりと言ふ可し。

晶子女史足下、物其の平を得れば鳴らず、至言なる哉、詩は懊惱の響き也、煩悶の聲也、戀を得たるものに戀の詩あらんや、是れ懊惱なければ也、煩

悶なれば也、僕先きに足下が婦徳の上より論じて、暗にその處女時代に反らんことを勧めたり、計らざりき、僕と志を同じうするものがし、君ありて、物平を得れば、鳴らざるの理を説かんとは、足下速かに處女風、晶子に反りて、人格の上に、將た詩の上に、他の衆俗を超えて、大に明治の女詩人の面目を作らんこと、是れたゞ、獨り僕の切望するところなるのみならず、又廣く文壇江湖の諸君が同じく切望して止まざるところなる可き也。

三宅花園に與ふ

三宅花園女史足下、曩に才媛續出して、何れもか弱き紅筆の述作夥多しく、さながら櫻桃時を同じうして開くの觀ありし我が閨秀文壇も、一葉を失ひ、賤子を失ひ、稻舟を失ひて、頓に寂寥を覺え、超えて昨年薄氷を失

ひ、湘煙を失ひて、寂寞殆んど其の極に達したり、たゞ僅かに新詩社の風品子外二三女史が、新派の和歌に心を潜めて、才名ひとり昨年の騷壇を志まゝにせしも、是れ未だ歌人としての彼れ等なりしのみ、廣く閨秀作家としての彼れ等は、未だ何等の創思なく、述作あらざりし也。この落寞の創作界に於て、讀書家が常に望んで止まざりしところのもの、は實に才筆溢るゝが如き、足下の小説なりし也、思ふに足下の小説や、故一葉女史の如く、觀察多方面に亘りて、連筆縱横なるを得ずと雖も、而も故稻舟女史の如き、脂粉の氣を有せず、足下自身の位置より、足下自身の社會を觀察して、材を是れより取り來り、なだらかなる文字を以て、是れを寫したるもの、さながら春江の流れゆるやかなるに似たるもの、有るを覺ゆる也、概言すれば、足下の小説は上品なる小説也、而してわが女流社會の望んで止まざりしところのものは、實に斯種上品なる小説な

りし也、是下何が故に筆を收めて、一意文壇を退かんことを力むる。花岡女史足下、足下の如きは實に閨秀作家として恰好の位置に坐し、恰好の觀察眼を有せり、かの一葉女史の如きは、其の女性としては觀察あまり奇峭に過ぎて、却つて女流讀書家に對する資を缺きたるが如し、夫れ深刻の筆、奇峭の想は詩人として當然缺く可からざるが如きも、是れを以て女流社會に向はんには、危險に過ぎてむしろ讀者をして自ら作中の悲劇を演せしむるの恐れあるなきか、是れ理性の力極めて乏しき女流社會に對する閨秀作家の大に三省すべきところなる可き也、足下、穩和の觀察、流暢の筆致、中流以上の社會を寫して殆んど遺憾なきに似たり、一般の讀書家は讀みて以て或はマダルシとなさんも、婦女子の如きはむしろ是れを以て絶好の伴侶となさむ、詩人は必ずしも人を危險なる思想に導くを以て天賦となせるものにあらず、足下再び騒壇に立つて、往日の筆致を我が女流社會に致すところあらば幸也。

薄田泣菫に與ふ

薄田泣菫君足下、僕未だ深く足下を知らず、爲に親しく足下が性行、感想、閱歷等を窺ふに由かしと雖ども、足下が述作にかゝる「慕笛集」行く春等の詩集が果して足下が言へる如く歌うて感情を伴らざるものなりとせば、足下はまさに資性温厚、しかも内に熱を貯へ、情を養ひ、怒る可き時には大に怒り、歌う可き時には大に歌ひ、靜かなる可き時には大に靜やかに、興に乗じ、時に應じて、内に貯ふるの情熱を外に展ぶるの士にあらざるか、僕ひろかに友に語りて曰く、紛々たる今日の詩人中、最も詩人らしき資質を有せるは、夫れ信濃の藤村と浪華の泣菫乎と、友またこれををうなづく、思ふに足下、遠く是れを聞かば、敢へて當らずと、自ら謙じて

微笑せんか。

泣菫君足下、今の社會は、盲目の社會也、最も人に誤魔化され易き社會也、
かるが故に今の社會に於て最もエラガラるゝは、學問の修養なくとも、
温厚の資性を缺くとも、某々等の二三輩の如く、巧みに才を操りて世を
くらまし、みだりに大言を吐いて人を威すもの也、夫れたゞくります也、
威す也、其の品性の陋劣なる、識者よりこれを見れば、唾して棄つ可きも
の尠なしとせず、しかも現代の社會は是れを以てエラシとして下にも
置かざる取扱ひをなす也、泣菫君足下、曾つて出來損なひの詐偽師たり、
親泣かせの放蕩兒たりし某々の二三輩が、一躍、この氣運に乗じて大家
となり大詩人となりすましたるは、まさしく箇中の呼吸を呑み込みた
るが故にあらすや。
然れども足下、社會はいつまでも盲目ある状態にのみ居る可きものに

わらず、彼の某々二三輩の巧言豪語にくらまされ、たまされ、威かされた
る日本の社會も今や漸くその夢より覺め來りて、渠れ等の信す可から
ざるを悟り、渠れ等を信じたるの前非を悔い、翻つて次第に實力あり、修
養あり、而して更に資性温厚なる詩人文士を要求し來れり、是れまさ
に渠れ等當然の天罰、足下は寧ろ僕と共に雙手を拍つて、其状態を笑却し
去るべき乎。

泣菫君足下、上述する如き社會に於ては、温厚足下の如き詩人をば、到底
迎へ容る可き餘地あらざりし也、足下夙に早稻田に文學を修めて、泰西
の藝術に心を潜め、詩體の新工夫に思を凝らし、苦心に苦心を重ねたる
の結果、遂に「先年、暮笛集」を公けにするや、世は未だかの某々等の二三輩
にくらまされ、威かされつゝ、僅に足下に拂ふに足下が費したる苦心と
經營とに足る可くもあらぬ、一瞥を與へたるのみ、しかも世が漸くその

眠りより覺めたる今日、新たに市に願たれたる足下の著「行く春」は、かの「暮笛集」と同著なるかを疑はしむる計りに、世人をして渴仰せしめ、熱鬧せしめ、争うて是れを購讀せしめぬ、是れ我が讀書界一般の進歩、遂に足下の詩を要求せしめたるにも困る可けれど、又以て讀書家が漸く空言ありて實質なき山師的文人を排して、資質温厚常に孜孜研究を怠らざる修養の士の出現を要求せんとする斯界の傾向を窺ふに足らずや。

泣菫君足下、社會は斯くの如く漸く進歩し來りて、空論と放言より離れ、着實なる文人の語に耳を傾くるべくなれり、某々二三の山師詩人は、まさに足袋跳足のまゝにて駈け出す可きか、今の狼狽の様はとまれ、従前最も着實に最も眞面目に文藝の修養に怠らざりし足下及び足下等、二三同輩の得意思ふ可き也、足下年なほ少、冀くば過つて世の濁浪に投ずる事なく、ますます修養を積み、將來の日本詩壇に於ける月桂冠を戴か

んこと、是れを切望する、僕のみには非ざる也。

足下の詩既に世の定評あり、僕また何をか言はむ、思ふに足下の詩は、あまりに豊麗の趣致に富みて、却つて生硬、佻屈の弊に陥る無きか、是れを譬ふれば、足下の詩は五彩まはゆき計りに掛け渡されたる虹の橋の如し、うち見るにうつくしども、壯んちりとも稱す可き言葉に困しむ計りなれど、よきが上によきを望まば、尙其の虹の緩う流るる春の水に映りたるが中々に美しからずや、望むところは豊麗に加ふるに流暢也、願はくば白粉コツテリに過ぎて、厭味多きに陥ることなかれ。

最後に僕は足下の著「行く春」中、僕の最も好句と覺えたる一聯を取り來りて、以てこの書を結ぶとせむ。

つひには缺けし瓶子より
したる酒をうち嘗めて

これ趣味ありと盃の
 圓きをいどふものぐるひ(鐵幹に酬ゆ)
 嗚呼日本國民始めてこの好句を聞く、足下たるもの益々力めざる可からず。

平尾不孤に與ふ

平尾不孤君足下、去年の夏萬朝報紙上に於て、「女學生と小説家」と題して、足下がさる女學生と私通し、これを妊娠せしめて遂に墮胎せしめたるの惡徳を書き立て、更に足下が其の情婦に送りたる手紙を載せて、大にうの醜行を攻撃するや、反響忽ち文壇にすさまじく、或るものは朝報の記事に同じて足下を非難し、或るものは足下に同情を寄せて大に朝報を攻撃し、囂々として暫くは嗚りを鎮めざりしが、足下この間に於て何

處にか隠れけん、關西の健筆家として名ありし足下、爾來「新小説」に書かず、「小天地」に筆を執らず、もとより單行の書冊を綴らず、非難の聲やうやく收まりし今日、未だ杳としてその消息を耳にせず、まさか「淵川」に身を投げて、自殺を圖りたるにてもあるまじけれど、ざりとはおまりに膽ツ玉の小さきに過ぎずや。

不孤君足下、今日の社會に於て、丁年以上の男子が一人二人イロを拵らへざるもの幾人かある、かの口に道を説き、筆に理を論ずるの士、一寸見は中々に大層らしけれど、さて其内幕に立ち入りて観察すれば何れも妻以外に情婦を蓄へ、妾を圍ひ以て得々たらざるは無し、而も這箇男女の關係や、聖なる戀愛に基づいて成り立つものは殆んど皆無にして、何れもみな燃ゆるが如き情慾に驅られて爲すにあらざんば、是れに伴ふ一種の利害關係より成立せしむるもの、比々おほむね然り、斯くの如き

は是れ當然の事也として自ら毫も耻づるの色なければ、社會また是れを黙認して、殆んど當然の事を以て相許しつゝあるが如し、足下此間に有りて先づ新聞の三面記者を煩はす、僕ら、是れを思つてお氣の毒さまの念に堪へざる也。

僕敢へて足下が爲めに辯護の勞を執らんと欲するものにあらず、然れども渠れらの妻あるに比して足下は未だ妻あらざるの人、尙ほ幾分の寛恕す可きの點を有する也、況んやその愛やむしろ聖なる戀愛の上に立てるもの、誤ちて足下等の交情が肉に落ちたるは責めて是れを戒む可し、雖も其の交りの一時的にあらずして、更に大に將來を契らんとなすに於ては、罪は罪なるも未ださほどまで、聲を大にして答ひ可き限りにあらざるを思ふ、是れを猶ほ大に責めて、遂に九仞の壑底まで陥落せしめずんば止まずとなすは、あまりに冷酷無慈悲の所置なる也。

不孤君足下嘗つては關西文壇の秀才となして、大に足下を喧傳したる江湖社會も、一たびかの記事の朝報紙上に現はるゝを見ては、是れ自業自得のみと冷かに笑うて、未だ一人の足下を扶けて、再び操觚の人たらしめんことを勉むる者なし、足下この冷酷なる所置を以て、何とか見たる、不孤君足下然りと雖も、足下の罪惡は依然として、足下の罪惡也、たゞ速かにこれを悔いて、更に捲土重來の勢を以て、關西文藝の振興を計るところ、あれ斯くの如き、小毀譽、小頓挫、に辟易し、筆を折つて、また文壇に立つことを避けんとするが如きは、堂々たる男子の面目也、言ふを得んや、罪あれば悔い、過ちあれば謝し、以て大に國家社會の爲に盡す、また可らずや、些々たる小毀譽に困じて、其の身の隠れ場所を探すが如きは、匹夫の事に非ずんば、婦女子の事のみ、足下了する所あるや否や。

この稿を終りし際、恰も僕を訪ふものあり、曰く、不孤、新たに東都に來

りかの女學生と合登の式を擧げたり、而も素行未だ修まらず一夜として吉原の大門に渠れの姿を見受けざるは無し、と果して眞乎、更に後日を俟て大に論ずる所あらん。

三宅青軒お與ふ

三宅青軒君足下、足下が文壇諸士の忌避するところなるや、久し、足下を論ずるもの異口同音、みな謂へらく、青軒は文壇無二の醜漢也、其の口を開いて言ふところ、キザな通を振りまはすに非すんば、忌味タツブリのうね惚れを洩らすのみ、文壇に置きて何等の要ある者にあらず、速やかに是れを文壇以外に放逐す可き也、斯くの如きは僅かにこの一二年前よりの事にあらず、足下が博文館に入りたる當時より續けらる、嘲罵の聲なる也、而も足下恬として是れを顧みるところあらず、近時の

態度はむしろ益々キザに、忌味に陥り行くが如し、足下何を厚顔にして破廉恥なるの甚しきや。

現に足下が編輯しつゝある文藝倶楽部のわが社會と文壇とに及ぼす影響は如何、徒らに寫眞を増し、紙數を加へ、いとも醜猥なる繪畫を挿むが如きは、思ふに足下が意匠にかゝるものなるべし、雖も其趣味の低落と其文字の卑猥とは唾して棄つ可きものあるを見るなり、吁、この深靡の体裁、頗る今日の墮落せる人間の要求を充たすに力めつゝあるが如し、實に足下の編輯する文藝倶楽部の如きは、文壇に何等貢獻するどころ無きのみならず、寧ろ墮落せる今日の社會をして益々墮落せしめ、腐蝕せしめつゝあるもの宜しく是れを火中に投じて、將來斯種の文字の出現を禁す可き也。

青軒君足下、忌憚なく言はしむるところあらば、僕は既に足下に向つて、

厲告し督責する丈けの勇氣を失ひたる者也、從來諸氏が熱心に忠實に
 足下に厲告し督責するところ有りたるもの、足下は是れを以て何とか
 聞きたる、今の如き足下が態度を見て、尙ほ是れを試むるが如きは寧ろ
 迂の甚しきもの、僕また須らく渠れら諸氏に和して、去れ足下」と大呼せ
 ん也、我が文壇と社會とは一人の足下を去らしめば茲に幾分の廓清を
 計り得べきを、す信足下夫れ記せよ。

堺枯川に與ふ

堺枯川君足下、足下筆を朝報社に執りて、常に家庭を論じ、社會を論じ、風
 紀を論じ、貞操を論ず、其筆常に穩雅、平淡の中に一種言ふ可からざる妙
 味の存するあり、覺えず讀者をして渴仰の念を生せしむ、僕も亦是れ等
 讀者の中に交はりて、常に足下の風采を想望して止まざるもの也。

枯川君足下、夫れ今日の社會は洵に矛盾の社會也、撞着の社會也、而して
 又更に冷酷の社會也、殘忍の社會也、足下及び僕等はかゝる社會に於て
 何をか學ぶ所ありたるぞ、夫れ只だ矛盾のみ、撞着のみ、而して更に冷酷
 のみ、殘忍のみ、他に抑も何の學ぶところかありたる。
 嗚呼足下、一たび眸を放つて今日社會の狀態を一瞥せずや、かの寒風肌
 をつんざく雪の朝、破れ果てたる一枚の古胴着、つれ刺したるぼろぼ
 ろの古股引に六尺の大軀を僅に包みて、人まだ眠る東都の巷を、雄々し
 く、凛々しく、「今日の新聞」と叫びつゝ、斯くて全都の士女をうの夢より覺
 まし行くものは、夫れ新聞の賣子にあらずや、渠れの聲や聖にして朗ら
 か也、渠れの職務や重くして神也、嗚呼誰れか勞働して、苦學すべく滿都
 の夢を驚かし行く渠れが聲を以て聖ならずと云ふものあらんや、而か
 も今の社會は、否、今の紳士なるものは渠れが聲を以て、うるさしとなし、

邪魔也となし、遂には是れを門外に追ッ拂へとなす也。嗚呼、足下、是れ矛盾にあらざして、撞着にあらざして、冷酷にあらざして、残忍にあらざして、抑も何等の現象也となすぞ。

然れども足下、是れ猶ほ小事也。足下及僕等は是れよりも更に驚くべく、怒るべきの現象を今の社會に發見せり。足下は恐らくはかの紳士として今の社會より尊重せられ、淑女として今の社會より敬愛せられつゝ、ある諸氏の素行品性を詳しく知れるならん。僕もまた是れを詳しく知り、足下は抑も今の紳士なる諸氏を以て如何なる人也となすぞ。人を睨み、人を憐まし、あらゆる詐偽の方法を企たて、あらゆる恐嚇の手段を講じ、以て巧みに法律の網をくゞり、社會の人目を暗らまし、戸を搦へ、妾を貯へ、努むるを職業とせずして遊んで錢儲けをするの人、嗚呼、是れ今日の紳士として尊重せられつゝ、あるものゝ實際の素行品性にあらざ

や、足下は抑も今の淑女なる諸子を以て如何なる人也となすぞ。もとは是れ南廊北里の鄙女、朝に源氏の客を送りて夕に平氏の人と枕を交はし、其の果ては如何なる境界にさすらふやも計られざる身の、一夕の情に捨はれて遂にこの妻ともなり妾ともなり乍ら、世人よりは淑女を以て目さるゝに至りしもののみ、それ然り其の日常品性の陋劣醜汚なる、また多言を要せざるところ也、而して是れ今日の淑女として敬愛せられつゝ、ある諸氏が實際の素行品性なり、是れ矛盾にあらざして、撞着にあらざして、足下は抑も何等の現象ありとなすぞ。

枯川君足下、今日の社會は斯くの如く矛盾せる、撞着せる社會也。斯くの如く冷酷なる、残忍なる社會也。嗚呼、足下、誰れか今日の社會に於て、眞面目と力行とを旨として、以て大に其の羽翼を伸し得たる、又見よ今日の紳士と呼はるゝものにして、孰か盜を働き、孰か詐偽を働かざる、然して

この盗賊なると眞面目なるとの中間に位する徒の日常の生活を仔細に観察すればおほむね色に溺れ酒に没り然らざるものは黄白に眩暈してまた正氣を存せるものを見ず唯だ是れ蠢々として東にうごめき西にさまよひ小功名小富貴に戀々としてさながら水桶の中の芋の如く我れ勝ちに上へ浮き上らんともがきつゝある有象無象也生きたる幽霊也人間の形を假れる大蛇小蛇なる也嗚呼足下僕敢えてシヨウベシハウエル一輩の世界觀に心酔するものにあらずと雖も廣くわが社會を見渡して固え苦む人類と畜類との外何等僕の眼に映するものあるを覺えざる也。

枯川君足下斯くの如き亂調子の社會に於て足下の如く眞面目に正直に家庭を論じ貞操を論じたればとて其の渠れ等が心緒に響くところの微推して知る可きにあらずや僕をして假りに足下の位置に立たし

めば僕は寧ろ家庭や社會や人倫や貞操やあらゆる是れらの積極的文章を排して只だ一語ぶつこわれよと絶叫せんのみ夫れ亂れてこわれて茲に始めて物新たに建てらる今の社會に於て僕が望むところは只だ是れをぶつこわすの一あるのみ敢へて足下に問ひて足下が意のあるところを聞かんと欲す。

正岡藝陽に與ふ

正岡藝陽君足下足下年少にして氣鋭に筆また一種の劍味を帯びて罵詈嘲弄至らざるもの無く時に或は公候を罵つて快となり時に或は社會を醜弄して喜色あり其の文おほむね不羈卓落殆んど常人をして端睨するを得さらしむ洵に是れ前途有望の論士僕また足下が風采を翹望して止まず茲に一書を與へて共に少しく語るところ有らんか。

藝陽君足下、足下の著書の世に出でたる始めを「新聞社の裏面」となす、委曲の觀察、痛快の筆鋒、久しく世人の聞かんと欲したる伏魔殿、裡の光景を描きて、ほゞ盡せるところ有るが如し、僕また故ありて、少しく新聞社の内幕を知れる者、足下の著を読んで快となすことの、普通讀者の上に出でたるは、又當然の事か、「時代思想の權化」また能く一代の梟傑星亨を論評して遺憾なし、「婦人の側面」は殆んど以上二書の著者と別手に成れるが如く、的確の觀察、雄健の筆致、別にまた見る可きもの有りて存す。若し夫れ「嗚呼賣淫國」に至つては、實に是れ日本今日の出版界に於て多く見ざるの快文字、熱罵冷嘲、殆んど假すところ有らざるに似たり、而して足下が新著「人道の戰士」の一書、またよく江湖の歡迎するところとなりて、出版日未だ淺きに關はらず、既に已に其第二版を賣盡したりと、其の斯くの如きもの、必ずや熱筆の氣、悲憤の辭、深く我が讀書界を抉るもの有るに、因せずんば、あらず、足下が斯文に於ける造詣、まことに欽羨の情に堪えざる也。

然り、斯くの如きもの、豈た一人の僕のみならんや、思ふに文壇江湖の諸氏、何れも皆な目を聳て、足下が將來の成功を待ちつゝ、ある可き也。然りと雖も、猥りに足下をおだて上げて、徒らにウヌ惚れを強くさせるが如きは、是れ決して僕が事にあらず、況んや足下が前途の多望なるを信するの僕、寧ろ一苦言を薦めて、偏へに其の邪路に走らざらんことを冀はんとする、また當然の責めならざらんや、思ふに足下が筆や實に奔放、縦横僕が會つて傳聞せる足下が、性行に似たる者あり、思ふに才餘ありて、氣徒らに逸るの筆は、一たび逸り過ぎては、又ゴロツキの口調に陥る無きを、保す可からず。「嗚呼賣淫國」の如き、また實に幾分この傾向を帯びたるもの、「其の面に唾せよ」の口調や、實に近時の文壇稀れに見るの快

文字なり。雖も誰かまた這箇二三字の中にゴロツキ的の面影を窺ふに難しと云ふものあらんや。もど是れ今の社會に感ずるところ有りその激語是れを責めて斥くるは寧ろ酷に近しと雖も而も斯種の文字にして今一步の進むところ有らば熱罵はやがて喧嘩腰となり冷嘲はやがて一杯元氣と變じ斯くして更に手拭の鷲掴みとなり「ベランメエ」となり大立廻りとなりて遂に茲に大修羅場を演ずるに至る可き也。文大立廻りとなりては遂に全く其の品位を損じ價値を失ひたるもの足下豈に斯くの如き無頼の徒に倣うて可ならんや。

藝陽君足下。足下の文は實に斯くの如き危険なる地に坐せるもの也。不羈奔放筆手に従つて動き氣筆に従つて昂ると雖もこの筆やこの氣や、共に極めて危険なる筆也氣也其筆にして若し賣淫國「以上に動かば足下の筆は遂に無頼の徒の喧嘩腰に類す可し其の氣にして若し「賣淫國」

以上に昂らば足下の氣は遂に無頼の徒の一杯元氣と變す可し共に極めて危険也と言はずんば有らず足下たるものまことに大に心して可ならん也。

然りと雖も足下僕豈に是れが故を以て足下の筆を羈し氣を阻まんぞ欲する者ならんや軟弱平凡今日の如き文壇に於て熱烈足下の如く能く罵り奇骨足下の如く能く嘲るの士を得たるは僕のひそかに以て快となすところ唯だ願ふところは足下自ら少しく其の霸氣を抑へて以て罵る時には大に罵り締るときにはキチンと締らんこと是れのみならずし無くいつまでも罵つて居るが如きは是れ豈に文壇論客の態度也と言ふを得んや而して足下が永く其の功を收むるの要諦也と言ふを得んや僕の言ここに及ぶは是れ偏へに足下の前途を患ふるが爲めのみ足下冀くは是れを寛假せよ。

この文を稿して筆を擱きたる時、一友來りて傳ふらく足下病を得て鎌倉の地に静養しつゝあり、咯血二三度に及びたりと、果して眞乎、好漢幸ひに療養を怠ること無く、速やかに往日の健に復り、以て益々筆硯を研磨し、著實に眞摯に諤々の議を敢てせんことを、至囑。

千葉江東に與ふ

千葉江東君足下、足下の名未だ多く現はれずして、人また文壇に足下有ることを知る者稀れ也、而も足下が熱烈の文字と、精覈の觀察とは「文庫」誌上に上りて常に社會を嘲り、足下を罵りて止まず、一字一句悉く熱ならざる無く、血ならざるは無き明快悲痛の筆致は、僕これを廣くわが文壇に推して憚らすと、なすところのもの也。

江東君足下、僕未だ足下を知らすと雖も、思ふに足下は内に焰の如き熱

氣を蓄へ、而も社會文壇を患ふるの念、是れを洩らすに人無く僅かに文字を借りて、その鬱抑を遣らんと欲するの士にあらざるか、よしや然らずとするも、僕は足下の文を見て、獨り然りどうあづきつゝある也、僕未だ文字に慣れず、偶々筆を取れば未熟生硬、嚙んで嚙み切れざるが如き体をなすと雖も、而も内に蓄ふるの不平鬱悶、信すらくは必ず人に劣らざるもの有りて存す、僕が足下を以てひろかに會心の友となして自ら樂む所以のもの、足下須らく了するところ有りて可也。

足下、今日の文壇や實に腐敗墮落の頂に達せり、此の間に立ちて功を收めんと欲する者は、須らく山師、相場師の爲すところを眞似、政略機智常に眼を社會の好奇心に注ぎ、忘恩悖徳巧みに人目をくらまして敢へて耻とす可からざる也、漸くの如きを以て文士功を成すの要諦也とせば、胸に多少熱烈の氣を有するもの、到底永く是れ等の徒と伍する能は

ざるところ、而も亦退いて、靜に滄浪を唱ふか如きは、堂々たる男子の好んで就く所にあらざるなり、已むあくんば一枝の筆を振つて、滿腔の熱情を吐き、以て不平と幽鬱とを慰め兼て墮落せるわが文壇を救ふに努めんかな、足下了するところあるや否や。

「ほとゝぎす」派の俳人及び

萩の家門下の歌人に與ふ

「ほとゝぎす」派の俳人及び萩の家門下の歌人諸君足下、僕思ふに凡そ物亂れて而して正しき結果を呈したること未だこれあらず、紛糾錯雜、四分五裂、斯くの如くにして果してよく利益ある結果を見るを得る乎、僕これを萩の家門下の各歌人の近狀に見て、予の益々然るを覺ゆる也、萩の家の門下秀才多しと雖も、其の最も江湖に喧傳せらるゝの歌人を

服部躬治、與謝野鉄幹及び金子薫園の三氏となす、其の歌文に於ける技や各々一特色を具へて、躬治君は「文庫」に凭り、鉄幹君は「明星」を機關とし、薫園君は「新聲」に立てこもりて各々相譲らず、互に自己の信するところを奉じて、以て後進の子弟を相導きつゝあるが如し、其の作るどころの和歌に就いて見るに、劃然として各々別あり、鉄幹君の歌ははゞ純主觀に近く、薫園君の歌は、純然たる客觀にして、而して躬治君の歌は兩者を折衷して成れる趣きあり、其の何れが最も價値ありやは、姑くここに論せざる可し、たゞ同一の門下より出でたるの士が、斯くの如く四分五裂して果して何をか得るところ有りや、是れ僕の先づ聞かんと欲するところ也。

人或は曰はむ、物亂れて而して後に革まる、其の革らんと欲する前には、必ずや先づ亂れざる可からざる也、と、一理ありと雖も、是れ未だ皮相の

見のみ、夫れ萩の家の門下生の如く四方に分裂して、各々一旗幟を翻へ
 したらんには、以て一時の奇觀を文壇に示すことを得んも、而も斯くの
 如くにしていつまでも互に折るゝ事無くんば、人心いたづらに惑亂し
 て其の何れに歸せんかを疑ひ、遂には惑ひに惑ひ、疑ひに疑ひたる結果、
 再び更に平靜なる古調の和歌に心を寄るに至るへきやも計り知る可
 からず、よしや夫れ程迄に至らずとするも、其の分裂の状態を目にしつ
 ゝある讀者の迷惑は如何ばかりなりとするぞ、渠れに就かんか、猶ほ是
 れに捨て難きところあり、是れに就かんか、遂に未だ渠れを忘れ去るこ
 と能はずと、偏へに疑惑逡巡して遂には今日の新派なるものゝ價值如
 何を疑はしむるに至るや必せり、是れを一門の諸士、悉く力を協せて、一
 意斯道の革新を計るに比すれば、其の結果の可否計り知る可きにあら
 ずや。

且つや以上の三派近日の態度に就いて見るに、何れも各々猜疑的の眼
 光を以て相迎へつゝあるが如し、躬治君は鐵幹君と相忌み、鐵幹君はま
 た薰園君と相疑ふ、斯くの如きはこれ止むを得ざるに因すと雖も、而も
 同門の諸士、互に嫉妬の間に鎗を削りつゝあるが如きは、あまりに淺ま
 しき次第と云ふ可からずや、斯の如き争ひは學問の争ひにあらずして、
 寧ろ勢力の争ひ也、功名の争ひ也、僕は益々亂るゝてふ事の、何等の場合
 に於ても利益あらざる可きを信せずんば、あらざる也。
 更に是れを、ほとゝぎす「派の俳人に就いて見るに、斯派に於ける虚子、鳴
 雪、碧梧桐、四方太等の諸君、各々力を協せて一意子規が主張したる俳句
 の革新の爲に盡瘁し、未だ曾つて亂れず、分れず、常に相共に語り、相共に
 作り、相共に同一の道を歩みつゝあり、この爲めに優に「ほとゝぎす」の一
 派を作り得て、世人より文壇の重鎮を以て目せらるゝに至れり、今日新

派を説くもの、誰れか又虚子派、鳴雪派云々と相分ちて呼稱するの煩を取らんや、かの紅葉、竹冷の如き純粹の新派俳人ならざる者は姑く論せず、今日の俳句に於て眞の新派なるもの、二と言はす三と言ふを要せず、只だ一のほど過ぎず、派に限られたるの觀あり、斯くの如くにして眞に俳句の發達は計り得可き也、それ亂れて盡すと集つて盡すと、其の文壇に貢獻する功勞果して何れが多き乎、僕の絮説を要せずして自ら明らかある可き也。

然れども是れ單に渠れら諸氏の力のみにあらず、又必ずや子規君の指導その宜しきを得たるもの有るが故ならずんばならず、落合氏は其の力微にして未だ門下の諸生を統一するを得ざりしと雖も、子規君や意氣極めて壯病んで尙ほ未だ斯壇の前途を思ひつゝ有りと言く、渠れら諸氏の團結して相一致せざる可からざるもの、必ずや子規君に於てこ

れ有る可き也、而も其の病いよいよ重くして、今や徒らに死期の至るを待ちつゝ、ありと其一たひ死してまた起つ能はざるの日や、或は渠れら諸氏の四方に相分裂して、各々うの自己の勢力を争ふの日たらんや、測り知る可からず、斯くの如きはわが俳句前途の爲めに何等利益するどころ無きのみならず、偶々以て所謂新派なるもの、價値を疑ふに至らしむること、恰かも萩の家門下の諸君に於けるが如なる可き也、子規君の素志を思は、渠らはまさに始終を一にし、進退を共にし、以て一意俳句の進歩を計る可き也。

僕が一致の是を論じて、分裂の非を説くや、略ぼ以上に於て盡せるに似たり、落合氏門下の諸君はまさに歌壇の將來を慮りて、區々たる惡感情を抛ち、互に力を協せて、文壇の發達を圖るところある可し、ほど過ぎず、一派の俳人はまさに子規君死後と雖も、其の生前の心を以て、相渝ると

こゝろ無く、一致協力して、子規君生前の遺志を継ぎ、以て俳壇の前途を思ふ可し、要するに萩の家派の諸君は現在の子規派に鑑みて一致の力の如何に大なるかを思ひ、子規派の諸君は又現在の萩の家派に鑑みて分裂の非の如何に非なるかを思ふ可し、各々斯の如くにして、歌俳両壇の爲め、大に盡すところ有れば、僕が諸君に望むの點は實に是れなり、また他を言はんや。

「公開状」著者鷺泉漁郎に與ふ

「公開状」著者鷺泉漁郎君、足下は僕也、僕は足下也、足下と僕とは實に同一の人なりと雖も、而も「公開状」著者としての足下と、錦町の一小破屋に衣食する僕と、其間多少の相違なくんば、あらず、操觚の足下と、然らざる僕と、豈幾分の異るところ無からんや、茲に「公開状」著者としての足

下に、一書を與へんと欲するもの、これ實に眞の僕也、然り、「公開状」著者としての足下より、覺めたるの僕なる也。

漁郎君、足下、上來、足下が文壇の諸氏に與へて、共に是れと文を語り、詩を論ずるもの、その多くは罵詈に涉り、嘲弄に傾き、一として禮を以て始まり、禮を以て終りたるもの有るを見ず、而して其文字多くは平凡にして亂雑、是れ足下が未だ筆硯に慣れざるが爲めならんと雖、抑もまた先輩諸氏に對して、禮の至れるものとなす可きにあらず、足下たるものまさに三十餘家の前に割腹して、其の罪を謝せざる可からざる也。

然り、足下たる者まさに其の罪を謝するところ有る可し、然りと雖も、足下が筆を依つて罵詈せられ、嘲弄せられたる、渠れらの諸氏も亦、これと同時に幾百万、幾千万のわが國民の前に割腹して、而して其の罪を謝するところ有らざる可からざる也、渠れら諸氏が表ては、文士詩人の名を

標榜して、社會を欺き、文壇を欺き、以て其の文士詩人たるの實を果たさ
 いるや久し、其の罪や渠れら諸氏を罵つて止まざりし、足下に重からず
 して、むしろ足下をして是れを罵る可く餘儀なくせしめし、渠れら諸氏
 に重かるや必せり、嘲弄するもの、罵詈するもの、罪は即ち罪ならんと雖
 も、其の餘儀なきの心裡を思ひては、ろくに是れを憐まざるを得ず、僕
 足下を憐みて、渠れら諸氏を憎む。

況んや足下の筆を執るや、其の筆の向ふところ悉く是れを嘲弄し、罵詈
 したるにあらす、その贅す可きは、大に是れを贅し、敬ふ可きは、大に是れ
 を敬ひたるに似たり、この一事、以て足下がみだりに辯を好み、人を排
 擠し、誹譏するを以て快也となすの士にあらざることを證して、餘りあ
 るにあらすや。

漁郎君足下、僕曩きに足下に、潔く割腹して其罪を謝せんことを勧めた

りと雖も、斯く説き來りて再び黙思すれば、是れ敢へて足下が罪にあら
 ざるが如し、而して足下は、かの三十餘家の文士が國民の前に割腹して
 罪を謝する其の時まで、なほ斯くの如き罵詈と嘲弄とを續けて可なる
 が如し、「公開状」二篇、足下の罵詈と嘲弄とは、是れむしろ足下として、常
 然の事ならんのみ、其の是れを讀みて直ちに憤らんと欲する三十餘家
 の諸氏の如きは、實に是れ臭いもの、身知らずの徒、鼓を鳴らして堂々責
 むると、ある有りて可也、足下年齒漸く壯ならんとす、幸ひに餐を加へて
 ます、我が文壇の爲めに盡すところ有れ、「公開状」二篇、措辭の生硬、用
 語の亂暴、實に驚くべきもの有り、雖も斯くの如きは、むしろ足下が強
 めて改めんと欲するどころのものに非ず、仔細に是れを觀れば、箇の
 一、小冊子の中に、亦一片熱誠の氣の存するもの有る無からんや、敢へて
 錦町の破扉に衣食する僕より、公開状著者としての鮫泉漁郎君足下に

一△△△△△
書を呈す。

公 開 狀 終

明治三十五年四月八日印刷
明治三十五年四月拾一日發行

著 作 權 所 有

發 賣 元

著 作 者

荒 木 省 三

發 行 者

上 村 才 六

印 刷 者

岡 田 鍊 一

印 刷 所

岡 田 印 刷 所

發 行 所

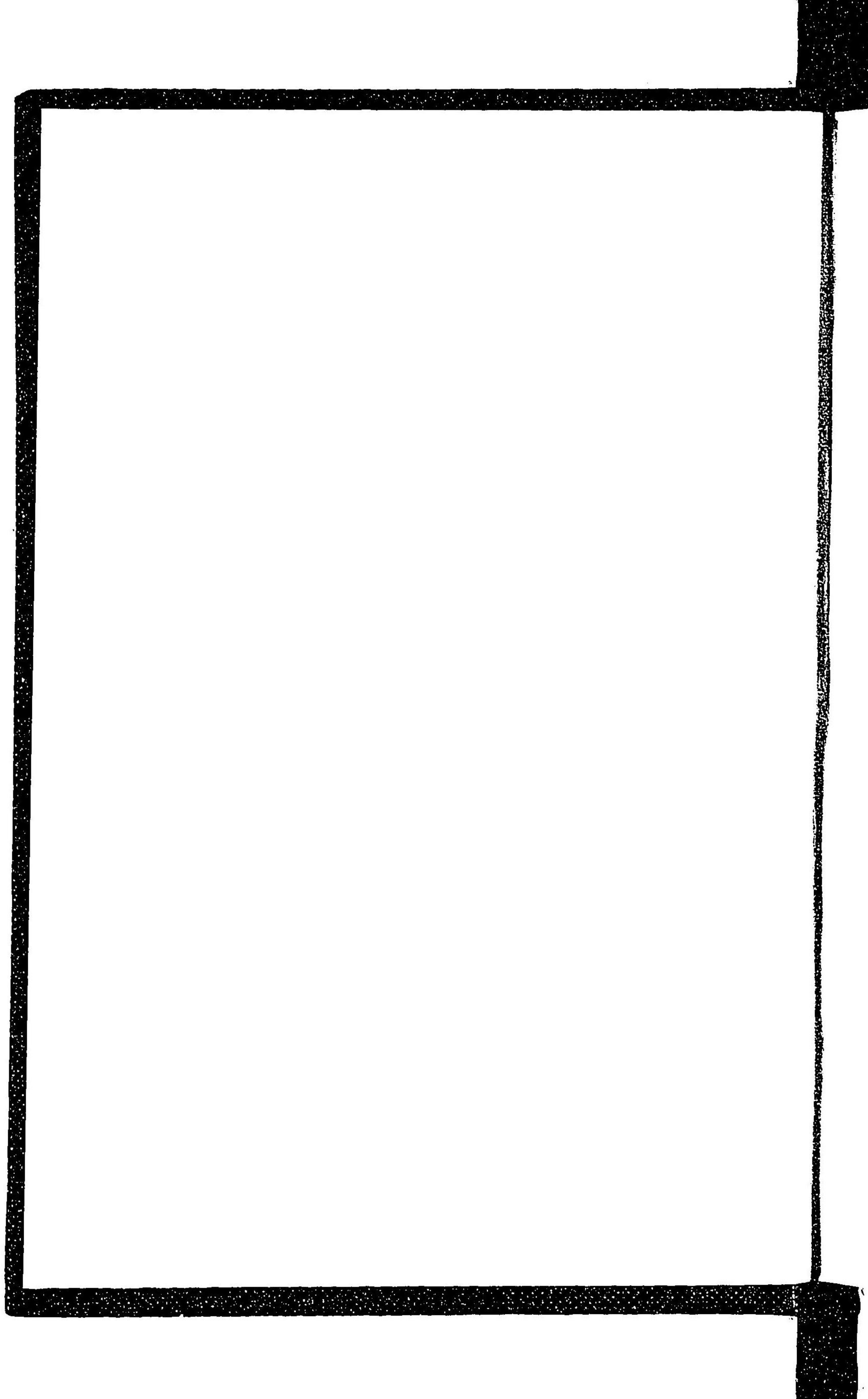
鳴 阜 書 院

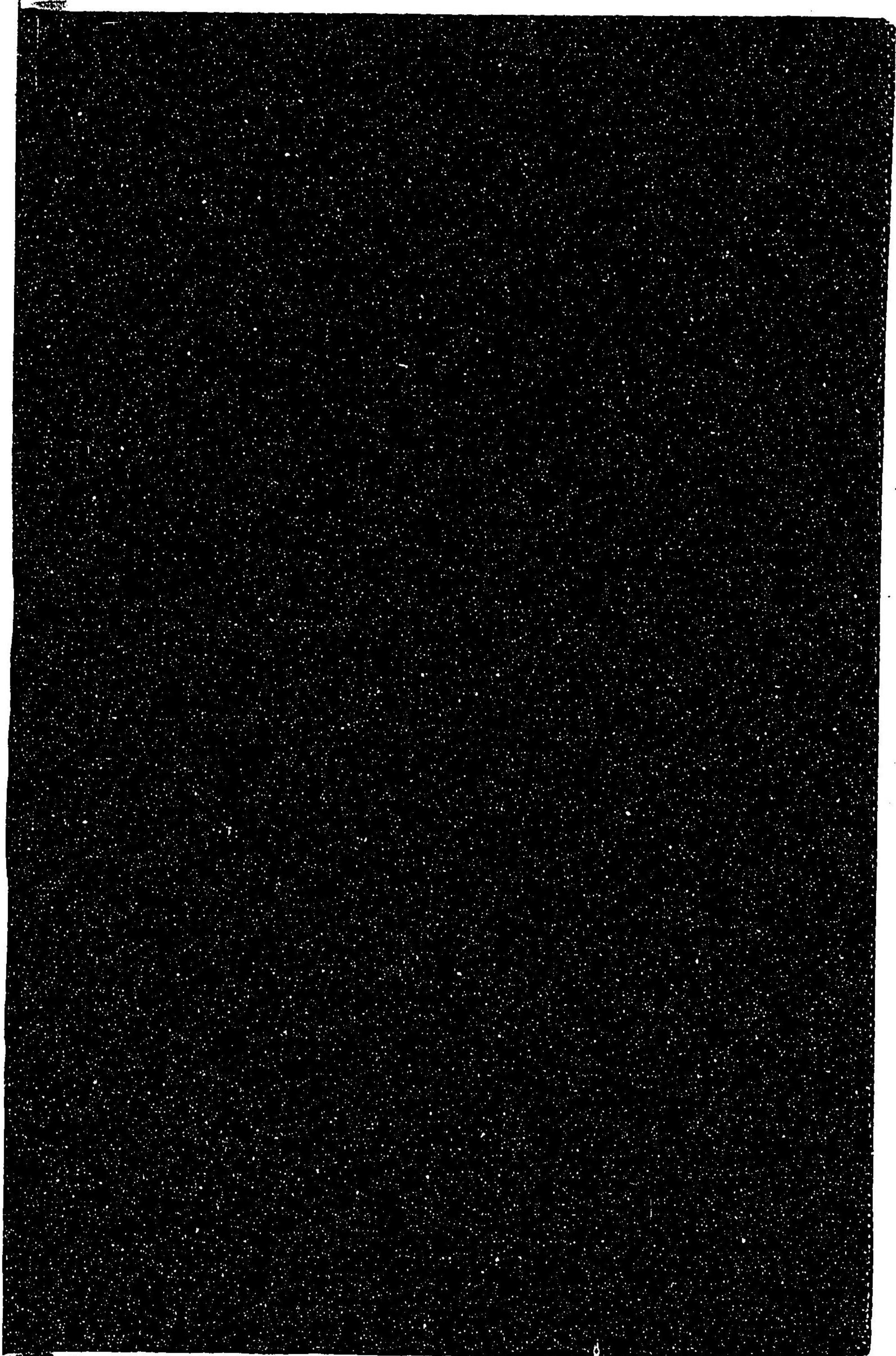
東京市神田區美土代町三丁目十六番地

集 成 館

定價 金貳拾五錢

1-483





82
437

096048-000-2

82-437

公開状

鷺泉 漁郎 / 著

M35

DBR-0320



